

丘浅次郎の『進化論講話』における変化の構造

—1904年版と1914年版の比較を通じて—

佐貫 正和

総合研究大学院大学 文化科学研究 日本歴史研究専攻

近代日本の進化論者は天皇制と一体どのように向きあったのだろうか。本稿の目的は、丘浅次郎(1868年～1944年)の『進化論講話』(1904年版～1914年版)を考察して、丘の進化論の特徴と、丘と天皇制の向きあい方とその変化の構造を明らかにすることである。

従来の丘をめぐる研究史は、丘の進化論は天皇制と「調和」した又は「対立」した、丘はナチスと酷似した、丘は社会ダーウィニズムである、『進化論』は『種の起源』のまる写しである、丘は民族間戦争を絶対視した、丘の社会進化論は荒唐無稽である、丘は人獣同祖説を主張した、丘は共和主義を主張した、など実にさまざまな批評をしてきた。このように、今まで丘の進化論は多様な観点から批評されてきたが、相反する各批評が乱立したままで、評価ははまだ定まっていない。各論者は、丘の思想をやや一面的に批評する傾向があったために、丘の思想の多様性とその変化は注目されてこなかった。私は、1900年代の丘には性格の異なる3つの要素が同時に混在しており、各論者がその中で1つか2つの要素を選んでやや一面的な批評をしてきたことが、丘と『進化論講話』の評価が定まらなかつた大きな要因であると考え。本稿の課題設定として、『進化論講話』の論理、読者のさまざまな批評、各版の叙述の変化などを総合的に考察することによって、1904年版では丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの相反する要素が同時に混在していたことと、1914年版では3つの要素が変化して丘の思想の方向性が定まったことを明らかにする。

2章では、丘が設定した目的や枠組みや章立て構成や論理などに注目しながら、『進化論講話』という作品全体の中に不均等に混在していた3つの要素を整理して、『進化論講話』全体の基本的特徴を考える。『進化論講話』を検討する上で、3つの要素が不均等に混在したと捉えることと、「自然における人類の位置」というキーワードに注目することが重要となる。まず、丘が設定した枠組みや章立てや論理などに注目しながら、各要素に対応する章と箇所と論理を検討して、『進化論講話』の中に不均等に混在していた3つの要素を整理する。次に、「進化の事実」という土台の上に「自然における人類の位置」が成立しえたことと、この二つの問題の根底には自然史という広義の歴史論が存在したことを検討して、「自然における人類の位置」から出発する丘の思考の特徴を明らかにする。最後に、「自然における人類の位置」から出発する丘の思考と、1920年代の丘の共和主義の関連性を考える。「自然における人類の位置」の考察には、1900年代に確立した丘の思考の特徴と共に、丘の思考と1920年代の共和主義の関連性を明らかにする意義がある。

3章では、『進化論講話』を戦前に読んだ人々が発表したさまざまな批評を3つに類型化

して、3つの要素が混在した『進化論講話』と読者の対応関係を明らかにする。『進化論講話』は、一般の人々が生物進化論を理解できた日本初の進化論書である。従来の批評の取り上げ方には、自己の論旨に合致する批評の紹介や考察にとどまる傾向があり、自己の論旨とは相反する批評を含めて『進化論講話』の読者の全体像が検討されることはなかった。そこで本稿は、各読者が、どの個所に力点を置いて読み、どんな論理に注目して、いかなる反応を示したのかを検討することによって、『進化論講話』をめぐる各批評を3つに類型化する。各批評の考察には、日本の一般の人々が初めて接触した生物進化論に示した反応の一端や、3つの要素が混在する『進化論講話』とその読者の全体像の対応関係を、多様なパースペクティブの中で明らかにする意義がある。

4章では、『進化論講話』各版の叙述を比較して、1904年版では丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの相反する要素が混在していたことと、1914年版では3つの要素が変化したことを明らかにする。まず、一覧表を使いながら、3つの要素の特徴が一箇所に集中して出ており、丘の3つの要素と読者の批評の3類型の対応関係も検討することができて、更に各版の比較によって3つの要素の変化も検討することができる「進化論と宗教と」とその周辺の叙述を比較する。次に、丘の「迷信」論の意味や、丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの要素が変化した意味と理由などを考える。特に本稿は、1913年以降に丘の論じた「迷信」が「天皇制」を意味したことを論証する。丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの要素とその変化の考察には、進化論者が天皇制と向きあう場合に想定できる3類型（進化論と対立する天皇制を批判する、進化論で天皇制を擁護する、進化論と天皇制を調和させる）の特徴と、その3類型が変化していく歴史的契機を同時に明らかにする意義がある。

キーワード：丘浅次郎、『進化論講話』、3つの要素、「自然における人類の位置」、自然史、視座の変革、社会ダーウィニズム、知のダブルスタンダード、天皇制、共和主義

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. はじめに | 4.1 3つの要素の混在とその変化 |
| 2. 『進化論講話』の基本的特徴 | 4.2 「迷信」論の意味 |
| 3. 読者のさまざまな批評 | 4.3 3つの要素が変化した意味と理由 |
| 4. 3つの要素の混在とそ変化の構造 | 5. おわりに |

1. はじめに

近代日本の進化論者は天皇制と一体どのように向きあったのだろうか。この問いを念頭に置きながら、本稿は、丘浅次郎（1868年～1944年）の『進化論講話』（以下、『進化論』と略称する）に焦点をあてて、丘の進化論の特徴と、丘と天皇制の向きあい方とそ変化の構造を明らかに

することを目的とする。一般的に丘は、進化論を普及した生物学者、進化論に依拠して言論活動を展開した社会批評家、東京高等師範学校教授として教育活動を展開した教育者などとして知られる。今まで丘の進化論はさまざまな観点から批評されてきたが、相反する各批評が乱立したままで未だに評価は定まっていない。特に、

各論者は丘の思想をやや一面的に批評する傾向があったために、丘の思想の多様性とその変化は注目されてこなかった。本稿の課題設定として、『進化論』の内在的論理、読者のさまざまな批評、各版の叙述の変化などを総合的に考察することによって、『進化論』1904年版では、丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの相反する要素が同時に混在していたことと、『進化論』1914年版では、3つの要素が変化して丘の思想の方向性が定まったことを明らかにする。

丘と『進化論』に関わる研究史を整理しよう。先ず、丘を批判的に論じた研究として、森戸辰男は、加藤弘之、石川千代松、丘など日本のすべての進化論は、研究の自由を得るために権力者の弾圧と闘う「研究自由闘争史」を経験したことはなく、国体論と「調和」したと位置づけた（以下、史料や研究書を引用する場合は、括弧をつけて表記することとする）。更に森戸は、丘が「外国における迷信政治」を批判して「我国権力者」を庇護する結果を生み、社会主義を否定して民族国家間の殺戮的闘争を主張したために、ナチスに本質的に酷似すると批判した¹⁾。横山利明は、『種の起源』の「まる写し」である『進化論』は、「キリスト教的世界観との対決」を意識しないために何の遠慮もなく書くことができたが、ライバルがいない丘には緊張関係が無いと評した。そして横山は、エンゲルスを「読んでもよさそうなのに一言もふれていない」丘の評論すべてを「社会ダーウィニズム」と評した²⁾。

次に、論点を含みながら丘を評価した研究として、筑波常治は、「逆説のわからない石アタマには、丘の思想を理解する資格がない。丘は天皇制にたいしてひそかに批判的だった」と指摘した。その上で筑波は、「生物が種を単位とする争いをくり返すごとく、人間は民族を単位の戦争を絶対に無くせない」と主張した丘の生存競争論の問題点を批判した³⁾。福井直秀は、「現在を国家一人種間競争の時代」と見て「種族維持」

を重視した丘の社会進化論は「荒唐無稽さを示した」と批判したが、丘の教育論は天皇の神聖化を示唆する「迷信の打破」をめざしたと評価した⁴⁾。右田裕規は、丘が人獣同祖説に依拠して、人を万物の霊長と特別視する人間観を批判したことや、皇国史観を婉曲的に批判したことを挙げて、『進化論』は「進化論と皇国史観の対立」が浮上する契機になったと論じた⁵⁾。この点で筑波と右田は、レトリックを用いた批判に注目して、丘の進化論と天皇制の「対立」を重視したといえる。ただし右田は、「進化論的見地から皇室の血統問題について公言した」進化論者は少なく、丘も隠喩的に皇国史観を否定するにとどまり、加藤弘之と同じく「皇国史観との両立」をはかったと論じた⁶⁾。この点で森戸と右田は、表現の明確性（公言したか否か）を基準にして、丘の進化論と天皇制の「両立」を重視したといえる。右田の考えが変化したのか、又は両見解が並存しうるのか説明はないが、多少のゆれ幅があるようである。私は、1920年代に丘が、生存競争の単位を民族間戦争から国内の階級闘争へと読みかえた点に注目して、丘の共和主義（君主制を支える階級心理を否定して、民主主義の精神と制度をめざす思想）を考察した。また私は、丘が「自然における人類の位置」（以下、「人類の位置」と略称する）という問題を出発点にして、すべての思考を組み立てたと指摘した（ただし、丘の思考の検討は課題として残った）⁷⁾。

従来の研究史は、丘の進化論は天皇制（国体論や皇国史観）と「調和」した又は「対立」した、丘はナチスと酷似した、『進化論』は『種の起源』のまる写しである、丘は社会ダーウィニズムである、丘は民族間戦争を絶対視した、丘の社会進化論は荒唐無稽である、丘は人獣同祖説を主張した、丘は共和主義を主張した、など実にさまざまな批評をしてきた。しかし、自己の論旨とは相反する各批評の論旨も含めて『進化論』が内包する多様性を検討した研究、『進化論』の読者が発表した各批評を類型化して同書との対

応関係を検討した研究、天皇制に関わる丘の思想の変化を検討した研究などは未だに無い。特に、『進化論』をめぐって、一体なぜ相反する批評が生みだされ続けたのかという問題そのものを検討しない限りは、『進化論』の多様性とその変化を軽視する議論や、既に百年前にだされた論点を再生産する議論がくり返されて⁸⁾、各批評が整理されないまま乱立する現状が続くだろう。

私は、1900年代の丘には性格の異なる3つの要素が同時に混在しており、各論者が1つか2つの要素を選んでやや一面的な批評をしてきたことが、丘と『進化論』の評価が定まり難かった大きな要因であると考え。そこで本稿は、『進化論』の特徴、読者の各批評、各版の叙述の変化などを総合的に検討することによって、1904年版では、丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの相反する要素が同時に混在していたことと、1914年版では、3つの要素が変化して丘の思想の方向性が定まったことを明らかにする。方向性と表現した理由は、1900年代の丘には多様な要素が未分化のままで混在しており、その中でどのコースも選択しえる可能性があったこと、弾力性に富む丘の思想がさまざまな批評を生む要因となったこと、1910年代に丘が1つのコースを選んだ歴史的契機を重視することなどによる。

本稿の章立てとして、2章では、丘が設定した目的や枠組みや章立てや論理などに注目しながら、『進化論』という作品全体の中に不均等に混在していた3つの要素を整理することによって、『進化論』の基本的特徴を検討する。『進化論』を検討する際には、3つの要素が不均等に混在していたと捉えることと、「人類の位置」というキーワードに注目することが重要となる。今まで各論者の批評が乱立してきた要因として、『進化論』の中に混在した3つの要素に対応する章と箇所と論理がきちんと整理されてこなかったことが指摘できる。ただし混在といっても、各要素が均等に並立し続けたわけではない。3つの要素は、『進化論』の中で各個別の章と箇所と論理に対応

しており、更に時代ごとに変化する要素もあるために、ある不均等を含んで混在していたといえる。そこで本稿は、丘が設定した目的や枠組みや章立てなどに注目しながら、各要素に対応する章と箇所と論理を整理することによって、『進化論』全体に不均等に混在していた3つの要素を検討する。

「人類の位置」は、丘が『進化論』を世にだす目的と強調した主題であり、この問題を説明するために本全体が構成されている傾向が強く、更に、丘の思考の特徴を考える上で重要となるキーワードでもある。右田が注目した人獣同祖説は、「人類の位置」という問題から導きだされる重要な理論である。しかし、「人類の位置」を根底で支えた土台と歴史論の特徴や、「人類の位置」から出発する丘の思考の特徴とそれが後年の丘の思想に果たした役割などは未だ明らかにされていない。そこで本稿は、「進化の事実」という土台の上に「人類の位置」が成立しえたことと、この二つの問題の根底には自然史論という広義の歴史論が存在したことを検討することによって、「人類の位置」から出発する丘の思考の特徴を明らかにする。私は、「猿の群れから共和国まで」（1924年、以下、「共和国」と略称する）を検討して、丘の共和主義の一部分を明らかにした。しかし、「人類の位置」という問題を検討しなければ、共和主義を根底で支えた丘の思考の特徴を明らかにできないという課題が残った。そこで本稿は「おわりに」では、「人類の位置」から出発する丘の思考と、1920年代の丘の共和主義の関連性を考える。「人類の位置」という問題から出発する丘の思考の考察には、1900年代前半に確立した丘の一生涯を貫く思考の特徴と、その丘の思考を通じて浮上する1920年代の丘の共和主義を支えた思想的基盤の一つを同時に明らかにする意義がある。

2009年は、『種の起源』が刊行されて150周年にあたり、ダーウィンの生誕200周年でもある。歴史学でも、自然科学の生物進化論と文化科学

の社会思想を、単純に直結させることは避けながらも、二つの科学や思想の接点を見つけて、その統一的把握を模索する研究会が行われた⁹⁾。この問題意識と関連して、『進化論』とその変化の検討には、生物の進化と人類の進歩を単純に直結させる優生学論や社会ダーウィニズムがもちやすい問題点を批判的に考える意義や、自然史論を柱にして生物進化論と歴史学の接点を見つけて、共和主義に関わる人類史の変化とその意味づけを模索した可能性を考える意義がある。

3章では、『進化論』を戦前に読んだ人々が、戦前や戦後に発表したさまざまな批評を3つに類型化することによって、3つの要素が混在していた『進化論』と読者の対応関係を考える。『進化論』は、一般の人々が生物進化論を分かりやすい口語体で理解することができた日本初の進化論書と位置づけられる。従来の批評の取り上げ方には、自己の論旨に合致する批評の紹介や検討にとどまる傾向があり、自己の論旨とは相反する批評を含めて『進化論』の読者の全体像が広く検討されることはなかった¹⁰⁾。そこで本稿は、『進化論』が公表された直後に同時代人が目したポイントを押えた上で、戦前の各読者が、どの個所に力点を置いて読み、どんな論理に注目して、いかなる反応を示したのかを検討することによって、各批評を3つに類型化する。読者の各批評の考察には、日本の一般の人々がはじめて接触した生物進化論に示した反応の一端や、3つの要素が混在していた『進化論』と読者の全体像の対応関係を、多様なパースペクティブの中で明らかにする意義がある。丘と読者の対応関係の検討を通じて、進化論や生存競争論や天皇制などの近代日本の重要な問題をめぐる言説や認識に関する一定の見通しも明らかになるだろう。

4章では、『進化論』各版の叙述を比較しながら他のテキストと合わせ読むことによって、1904年版では丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの相反する要素が混在していたことと、1914年

版では3つの要素が変化したことを明らかにする。本稿はまず、一覧表を使って、「進化論と宗教と」とその周辺の叙述を比較する。「進化論と宗教と」は、3つの要素の特徴が一箇所に集中して出ており、3つの要素と読者の批評の3種類の対応関係も検討できて、更に、各版の比較によって3つの要素の変化も検討できる重要な箇所である。

次に、『進化論』と丘の評論を合わせ読むことによって、丘の「迷信」論の意味や、丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの要素が変化した意味と理由などを考える。注意すべき点として、丘の「迷信」論の意味は、『進化論』を見るだけでは判明し難いという史料的制約がある。その上、レトリックという方法が駆使された丘の言説を読み解くには、丘独特のキーワードに注目して複数のテキストを合わせ読む必要もある。そこで、異なるテキストの中で、『進化論』と「迷信」をめぐる同じ問題がくりかえし論じられていたことに注目しながら、『進化論』と他の評論を合わせ読むことによって、丘の「迷信」論の意味とその変化を明らかにする。特に本稿は、丘が天皇を示唆する「迷信の打破」をめざしていたと評した福井の指摘を継承して、1913年頃に丘の「迷信」論が「天皇制」を意味していたことを論証する。横山は、ライバルのいない丘には緊張関係が無いと評した。反論として本稿は、「まる写し」とは矛盾する叙述の変化、丘がダーウィンとハクスレーから学んだ教訓とその日本への活用、丘が天皇制というライバルとの対決を選ぶ契機などを検討する。丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの要素とその変化の構造の考察には、進化論者が天皇制と向きあう場合に想定できる3類型(進化論と対立する天皇制を批判する、進化論で天皇制を擁護する、進化論と天皇制を調和させる)の特徴と、その3類型が変化する歴史的契機を同時に明らかにする意義がある。なお本稿は、人物の敬称は省いて、旧漢字を新漢字に改めた。

2. 『進化論講話』の基本的特徴

本章は、丘が設定した目的や枠組みや章立てや論理などに注目しながら、『進化論』という作品全体の中に不均等に混在していた3つの要素を整理することによって、『進化論』全体の基本的特徴を検討する。

土田杏村が丘を「日本における『進化論の父』」と評したように¹¹⁾、『進化論』は一般の人々が本格的な生物進化論を理解できた日本初の進化論書と位置づけられる。一般的に日本の進化論の受容に関しては、E・モースの進化論講演やスペンサー学説の紹介によって、1880年代に知識人の間で社会進化論が流行した。しかし、進化論の内容の理解には粗雑なものが多かった。更に進化論を理解するには、難しい学術書や洋書を読む以外に手段はなく、一般の人々が生物進化論を理解できる作品はなかった。その中で、ダーウィンが論じた生物進化論を分かりやすい口語体で一般の人々に普及することを目的に定めたのが『進化論』である。『進化論』の内容としては、進化論の学説史を整理して、過去から現在まで世界中に分布する各生物種属が歴史的に進化(変化)してきた事実を論じた上で、その生物進化の歴史の中に人類を位置づけた。同書は、1904年第1版から1940年第14版まで増刷されて、約6万部がだされた¹²⁾。

『進化論』に混在した第1の要素は、民間在野の一般の人々に向けて、「進化の事実」と「人類の位置」に関する知識を普及すると共に、その知識を認識できるようになるために必要となるものの見方(視座)を変革するという特徴をもつ。この第1の要素は、『進化論』各版の枠組み全体に一貫する特徴であると同時に、丘の生涯を貫く思考を考える上で重要なキーワードでもある。換言すれば、各時代における丘の様々な言説を読み解くためには、丘の思考構造の核となる第1の要素をふまえる必要がある。序文は、「専門学者」に向けて高尚な学説を論じる学術書以外には進化論の入門書がないことを遺憾に思い、一

般の人々が「進化論の骨髄」を理解できるように専門事項を省いて、「成るべく広く進化論を普及せしめたいとの精神」で『進化論』を著したと述べた上で、本の目的を次のように強調した。「著者は進化論の普及は人間に関する従来の誤つた思想を退け、自然における人間の真の位置を明にし、総べての方面に進歩・改良を促して(中略)一刻でも早く普及せしめれば、それだけ多く社会を益する訳であると深く信ずる」(傍点-引用者)¹³⁾。傍点部が、「進化論の骨髄」の核心部分である。

「第一章 緒論」は、学問上確定した「進化の事実」と、生物進化を説明する仮説段階の理論である自然淘汰説を区別して、「進化の事実」の説明を主眼とするために、仮説的理論は略述するにとどめると枠組みを設定した。「進化の事実」とは、自然界における数億年単位の自然史の流れの中で各生物種属が歴史的に変化してきたという事実や、数億年前に共同の先祖から起こった生物が数種類に枝分れして変化してきたという事実である。

「第二章 進化論の歴史」は、「動植物の種類は最初神が造つた其まゝのもので」変化したことのない「万世不変のもの」と捉える「生物種属不変の説」(以下、「不変の説」と略称する)が信じられてきた中から、リンネ、ラマルク、キュビエ、ライエルなどの研究と論争を通じて、「不変の説」を否定する生物進化論の考え方が形成されて、ダーウィンの『種の起源』の出現までに至る学説史を整理する¹⁴⁾。本稿は、丘が主眼を置くと強調した「進化の事実」と「人類の位置」に関わる第9章～第14章と第18章を、第1の要素に対応する章として捉える。略述にとどめられた自然淘汰説に対応する第3章～第8章は省略する。

第9章から第14章までは、各生物学の「事実が証明する所の大事実、即ち生物は恰も樹の枝のごとくに分岐して進化し来つたといふ事実」を山のように積み上げて帰納法的に説明することに

よって、「不変の説」を徹底的に否定していく¹⁵⁾。重要な問題として、「進化の事実」によって「不変の説」を否定した丘を支えた発想と学問的枠組みとは一体何だろうか。丘は、「元来生物進化論」とは「一種の歴史である」と捉える自然史の発想に基づいて、進化論と歴史学は関わりのない学問ではなく、対象（人文、地殻、生物）の歴史的变化を明らかにする目的や、過去の遺物（古物、古文書、化石）を研究して時代考証をしたり、現在の事実（口碑・儀式、器官）を調査して過去を考察したりする研究方法が共通すると、次のように論じた。

元来生物進化論とは、生物各種属は如何なる経路を過ぎて、今日の有様に達したかを論ずる物故、素より一種の歴史であるから、其の説く所の事項が確であるか否かは、全く歴史上の事項の真否を判断するのと同様な標準に従うて判断せなければならぬ。普通の歴史が人文開化の変遷を論ずるとく、又歴史的地質学が地殻の変遷を論ずるとく、生物進化論は十分発達した暁には、生物各種の変遷の有様を明にすべき筈のもの故、其研究の方法の如きも、前二学と全く同様で、第一には古代の遺物を研究して、其時代の有様を探り、次には現今の事情を調査し、之を基として古のことを察するのである。古物・古蹟・古文書が人間の歴史の材料となる如くに、地層の中に保存せられて今日まで残つた古生物の化石は、進化論の最も重要な材料となる。又現今の口碑・儀式等が歴史研究の参考となる如くに、現今の生物の身体内にある各器官の構造・発生等は大いに進化論の参考となる¹⁶⁾。

生物進化論を「一種の歴史」と捉えた丘の認識は、あらゆる学問が高度に専門化・細分化して個別学問となっている現在から見ると、突飛な主張に思えるかもしれない。しかし丘が、自然科学の進化論と文化科学の歴史学を、性格の

異なるものと捉えて切り離す学問認識とは異なり、やや大雑把ながらも二つの学問を結びつけることによって、人類をトータルに考える学問認識を提示しえた背景には、一体どんな学問的枠組みが存在したのだろうか。この問題を考える手がかりになるのが、自然史の別名の博物学である。博物学とは、自然界の実物（動物・植物・鉱物）を採集・記載・分類する学問であると同時に、博物学者ダーウィンのように、自然界の実物の多様性と歴史性を考える学問でもある¹⁷⁾。博物学は、すべての学問が自然科学、人文科学、社会科学などの各領域に切り離されて、その上更に、自然科学領域における動物学・植物学・鉱物学というように細かく枝分れするという、統計データと精密な実証を駆使する高度に専門化した近代的な個別学問が成立する以前から成立していた学問でもある。

近代日本では、1880年代から1900年代にかけて、西欧学問の輸入と帝国大学を基盤にした近代生物学の教育研究体制が整備される中で、博物学は終焉したとされる¹⁸⁾。これは近代の知の構造を考える上で、一方では、新たな時代に対応する必要に迫られて、各学問が専門的になり個別学問化していったことを意味する。しかし他方では、自然界における人類を含めた各生物の多様性と歴史性に対するトータルな視点と、それを根底で支えた知的好奇心が秘めていたエネルギーが失われていったことも意味したのではないだろうか。ただし、この近代の知の構造の変化は、大学を基盤とする官学アカデミズムの世界にはよく当てはまるが、民間在野の世界では、アマチュア博物学者が存続して独自の活動を続けたという点が重要になる。そして1904年に発表された『進化論』は、大学の学者ではなく民間在野の人々に向けて、世界中に分布する人類を含めた各生物の歴史的变化を自然史論として論じた博物学書と位置づけられる。

現在の視点から見ると、自然史論を柱にして生物進化論と歴史学の接点を見つけて人類を考

えた『進化論』は、一直線に結びつきがたい二つの学問を結びつけている印象を受けるかもしれない。しかし歴史的に考えれば、各学問を各領域内に細分化された個別学問として捉える学問枠組み自体が、1890年代以降に成立した歴史的な産物である。換言すれば、近代的な個別学問の成立がいまだ行われなかった最後の時代に当たる1880年代前半に思想形成をした丘が発表した『進化論』を検討すると、生物進化論と歴史学を結びつけるトータルな視点で、人類を含めた各生物の多様性と歴史性を考える作品を、分かりやすい口語体で一般の人々に伝えるという、やや大雑把ながら渾然一体としたエネルギーを秘めていた知の世界が浮上するのである。自然史（博物学）を柱にして生物進化論と歴史学を結びつけることによって、やや大雑把ながら自然界の一生物である人類の歴史的变化をトータルに考えるという学問的枠組みは、『進化論』のすべての版から「共和国」まで一貫する丘の思考の特徴である。

それでは『進化論』は、自然史論を一体どのような枠組みで展開したのだろうか。『進化論』の構成上、第9章から第12章までと第14章は、現在の事実を調査して過去を考察する。第13章は、過去の遺物を研究して時代考証をする。この二系統の自然史論が、第18章を支える歴史論となる。

第1の自然史論として、「現在の有様を基として、過去の変遷を推察」した第9章から12章までと第14章を整理する。「第九章 解剖学上の事実」は、人間・犬・鼠・蝙蝠・鯨など哺乳類の骨格構造が同じなのは各動物が「統べて共同の先祖より進化し降つた」証拠であり、魚類に見える鯨が胎生や肺呼吸をするのは「鯨の先祖は陸上に住んで居た獣類である」証拠になると論じて、「不変の説」を否定した。「第十章 発生学上の事実」は、一定の留保付きで「今日の一粒の卵から動物の一個体が出来るときには、何億年か何兆年かの中に其動物の種属が経過し来つた通

りの変化を、極めて短く略して繰り返す」と、生物発生原則（現在この説は疑問視される）を論じて、「不変の説」を否定した。「第十一章 分類学上の事実」は、分類単位となる種の境界が曖昧な理由は、最初に神が各生物を別々に造ったと考えると不可解だが、「生物各種は共同の先祖から進化し来つた」と考えれば理解できると論じた。「第十二章 分布学上の事実」は、「不変の説」に従えば、過去に分離したオーストラリアとアジアに同種の動物がいるはずだが、オーストラリアでは西洋人が移住するまではカンガルーしかいなかった事実を挙げて、「共同の祖先から進化し、樹枝上に分かれ降つた動物が分布して個別に進化した事実を論じた。「第十四章 生態学上の事実」は、現在の各動物に攻撃や防御の各器官が発達した原因として、「生物各種は皆進化によつて漸々今日の有様に達したもので、進化の原因は主として自然淘汰であると考へれば、保護色は必然の結果」になると論じて、「不変の説」を否定した¹⁹⁾。

第2の自然史論として、「第十三章 古生物学上の事実」は、「古代に生存して居た動物の遺体に就いて生物進化の事蹟を述べる」。丘は、「古代に生活して居た動植物の遺体」を対象にして生物進化を考える生物学と、地層の化石を対象にして「地球の歴史」を考える「歴史的地質学」が結びついた古生物学に依拠して、「生物の歴史の天然の記録」である化石を比較すれば、「生物の進化し来つた大体の有様」は推察できると論じた。この第13章にも、自然科学と文化科学を結びつけて人類をトータルに考えようとする自然史（博物学）の学問認識がうかがえる。例えば丘は、始原代は化石が少なく、太古代（古生代）は魚類とシダ植物の化石が出て、中古代（中世代）は恐竜と裸子植物の化石が出て、近古代（新生代）は獣類や被子植物の化石が出て、最近の新生代第4紀にだけ人間がいた証拠が出ると論じて、「不変の説」を次のように批判した。「若し生物種属が万世不変のものとしたならば太古代からも現

今と同種類なものが幾つか発見せられさうなものであるが、実際一つも無い」²⁰⁾。

以上の二系統の自然史論に基づいた「進化の事実」が、「第十八章 自然における人類の位置」の土台となる。この章で丘は、人類とは一体何物なのかという問題を「科学的」に考える方法を次のように提示した。

人とは何物であるかといふ問題を研究するには、自身が人であることは、一切忘れて、恰も他の世界から此地球に探検旅行に來た如き心持ちになり、他の動物と同様に人間の習性を観察し、他の動物と同様に人間の標本を採集して帰つた積りで研究せねばならぬ。(中略) 生物界の事実を広く集め、生物界の現象を深く観察し、之を基として科学的に研究した結果は、即ち進化論である(中略)〔動物が共同の先祖から多様に進化してきた「進化の事実」に照らして論じれば、〕人は総べての動物の中で牛・馬・犬・猫等の如き獸類に最も善く似て居る故、此等と共同な先祖から生じた一種の獸類である。而して其の中でも猿類とは特に著しく似て居る点が多い故、比較的近い頃に猿類の先祖から分かれ降つた(中略) 進化論は生物界全体に通ずる帰納的結論であるが、人間が猿類から分かれ降つたといふことは、ただその結論を特殊の例に演繹的に当てはめただけに過ぎぬ²¹⁾。

ここには丘の思考の特徴がよく出ている。第1に丘は、「自然(界)における人類の位置」(自然界における数億年単位の自然史の中で人類とは一体何ものなのか)という問題を一生涯かけて問い続けた。この問題に対して『進化論』は、自然界において各生物種族が多種多様に变化してきた長大な自然史の流れの中で考えれば、人間は獸類と「共同な先祖から生じた一種の獸類」であり、「近い頃に猿類の先祖から分かれ降つた」という「進化の事実」の答えを導き出した。生

涯丘は、「人類の位置」という人類に関する普遍的問題と答えを出発点にして、すべての思考を組み立てていく。

第2に、「人類の位置」から出発する丘の思考には、眼前の現状を唯一絶対のものとして固定的に捉えずに、現状を数億年単位の歴史的变化の中で客観的に認識する歴史観、人間を自然界から区別して特別視せず、人間を自然界の一部として認識する自然観、特定の人間を神格化せず、自然史の中でいかなる階級や身分の人間でも同等の一生物に過ぎないと認識する人間観などが密接に組み合わさっている。この丘の一生涯を貫く思考の特徴は、次の処女作にも大枠がうかがえる。「人間の社会も生物界現象の一部であるから、此社会の中で我々が常に遭遇する事柄は皆歴史的の元素を含んで居る(中略) 若し其歴史を勘定に入れずに単に現在の有様だけから論じて処理しようと試みれば失敗する(中略)〔自然界における人間の位置〕に関する考え方は、人間を特別視することなく、〕人間も他の生物と同様に、同じ進化の規則に従ひ同じ様な道筋を通つて今日の姿にまで進んで來たものと考へる」²²⁾。

第3に、宇宙人の探検旅行をイメージして、「他の動物と同様に」人間を観察し採集し比較して、自然界の一生物と認識した人間の歴史的变化を研究する方法は、人間が、自分自身も属している人間という研究対象を、自然史の中で極限まで突き放して客観的に把握するための想像上の操作である。人間は、人間以外の生物を解剖したり、突き放して観察したりすることはたやすいが、自分自身も属している人間そのものは認識対象として意識しにくいために、突き放して観察することは難しい。しかし、人間を観察する認識主体である自分自身を、人間からいったん引き離さなければ、人間の歴史的变化の客観的な把握も、人間を認識するものの方の変革も難しい。そこで丘は、想像上の操作によって、苔虫(卒論の主題)から人類までを含む各生物

が歴史的に変化してきた自然史の中で、「人間は猿類の一種であつて、他の猿等と共同な先祖から降つた」と認識する人間観を確立した²³⁾。

第18章を検討すると、丘の人間観の根底にも二系統の自然史論があつたことが判明する。第1の自然史論として、丘は、人間が哺乳類であることを証明する事実を通俗的に紹介して、現在哺乳類に属する人間は「獣類と共同な先祖から分かれ降つた」と過去の歴史的変化を論じている。まず丘は、人間と獣における骨格、感覚器官、生殖器官などの相似性を挙げたり、人間の皮で造った本の表紙、宣教師が見た南洋の人肉食、パリで獣姦を見せる見世物などの逸話を挙げたりして、「人体の構造・作用ともに獣類と殆ど違はぬことを明に示す」と論じた。次に丘は、「生まれると直に母の乳を飲んで生長し、日々空気を呼吸し、食物を食うて生活すること、老年になれば弱つて死んでしまうことなどは、人間でも犬・猫でも、全く同じである」と論じた。最後に丘は、今まで人間は「靈妙な特別のもの」と考えられてきたが、生物学の発達によって、人間は脊椎動物の哺乳類の有胎盤類の猿類の狭鼻類に分類されるようになったと論じて、次のように結論した。「動物学上、哺乳類の特徴と見做す点で人間に欠けて居るものは一つもない。それ故、人間の哺乳類であることは、確であつて、哺乳類である以上は犬・猫等の如き獣類と共同な先祖から分かれ降つたといふことも亦疑ふことは出来ぬ」。第2の自然史論として、丘は、人間が「猿類と共に猿類共同の先祖から漸々分岐して生じた」証拠となる過去の遺物として、ネアンデルタール人やジャワ原人を紹介して、「化石は皆人間と猿類の先祖との中間に立つべき性質を備へたものばかり故、全く進化論の予期する所と一致して居る」と考証している²⁴⁾。

第4に、丘が「人類の位置」を自然史という枠組みの中で考える契機は一体何だったのだろうか。1885年頃に丘は、人物列伝と年月を暗誦する歴史の成績が悪く、東大予備門を二度落第し

て退校になっている。後年に丘は、自分にとって「歴史」とは一体何かという問題を、次のように語った。

〔人物列伝の暗誦を批判して、〕更に大きく、この原因があつたために、この結果が生じたと云ふ様な、物の変遷の理由を究める歴史ならば、私は大好きである。現に生物の進化といふことは一つの歴史であつて、その普通の歴史に異なる所は、ただ年月が遙に長いと云ふ点に過ぎない。私はこの歴史には大に興味を持つて、世間にその智識を弘めたいと思ひ、今から二十三年前に「進化論講話」と題する書物を書いた(中略)私の歴史の点が悪かつたのは、私が歴史と名づけるものと、先生や学校当局が歴史と名づけるものとが相違して居たためであつた²⁵⁾。

丘は、二度の落第と退校の後に東京帝国大学理科大学選科に再入学した経験をバネにして、教師や学校が強制する「歴史」とは異なる、長大な生物進化の事実という「物の変遷の理由を究める歴史」をめざして『進化論』を公表した。丘は、選科生が本科生のように「学生」ではなく「生徒」と呼ばれて、本科生と同じ授業を受けて卒論を出しても学位称号がもらえないという制度的相違を、「世間や学校当局が、自分等は実力よりも形式を尊ぶ人間であると吹聴して居る様なもので、寧ろ恥ずべきこと」と皮肉っぽく語った。これ以降丘は、肩書を尊ぶ心理を徹底的に軽蔑する態度を形成していくと同時に、「〔私は〕頭は確に畸形であるに違ひない(中略)今日以後も、畸形のまゝで押し通すより外に途は無かるう」というように、自分を理想化せずに自嘲気味に眺める態度も形成していく²⁶⁾。実はこれは、先述した1880年代から1900年代における博物学をめぐる知の構造の変化と関わる重要な逸話である。丘が落第と退校と選科生を経験して、官学に対してある種の屈折を抱えた対

抗意識を保ち続けたことこそが、官学の世界では終焉する博物学を選び取る理由になり、更に、大学の学者ではなく、民間在野のアマチュアに向けて、人物列伝の暗誦ではなく、人間の歴史的变化を自然史論として考える方法を提示する原動力になったからである。

『進化論』に混在した第2の要素は、日露戦争を背景にして、人種や国家などの「全団体の維持繁栄」を目的に定めて、その目的を達成する手段として、人種間や国家間の武力戦争を意味する生存競争を重視していくという特徴をもつ。第2の要素は、「第十九章 他の学科との関係」の「進化論と社会と」や「第二十章 結論」の一部分に見られる。特に、進化論と人間社会の接点を考える上で重要となる生存競争論に関わる論点として、丘の生存競争論が、どの時期に、何を対象（競争の単位）に定めて、どう意味づけたかという問題が大切になる。日露戦争期における丘の生存競争論の問題点が最も強く出た『進化論』1905年9月5日版（ポーツマス条約調印と条約反対の日比谷焼打ち事件が起きた同日）の第20章を挙げよう。

人類の生存競争における最高の単位は人種或は国であつて、国と国と、人種と人種との競争では唯強いものが勝ち、弱いものが敗けるの外はないのであるから、社会の制度を改良するに当つても常に人種或は国を本位として打算しなければならぬ（中略）〔「全団体の維持繁栄」に有効な行いをした者は尊重して、有害な行いをした者は制裁を加えて、〕 遺伝病のある者は当人には気の毒ながら子を遺さぬ様に制限し、先天的に悪事をなす傾向を有する者は、速に之を社会より除く等のことも必要であらう。又従来人為的に自然淘汰の働きを止めて弱い愚なものでも立派に生存せしめて居た如き制度は全く廃して、知力・健康ともに優れたものは必ず勝つて、団体中の主要な位置に働き、劣つたものは必ず負けて退かね

ばならぬ様な仕組に改め、代々生れる子の中の最も優れた部分が団体を継続する様にせねばならぬ。斯くすれば自己の属する人種の進歩改良は自然に行はれ、他人種との競争に当て勝つべき見込みは益々多くなる²⁷⁾。

日露戦争期に丘は、「全団体の維持」に関わる優等者と劣等者を選別する社会制度を実現すれば、人種が「進歩」して人種間競争に勝つと捉える優生学論や、人種や国家を生存競争の「最高の単位」と絶対視して武力戦争を正当化するかのような生存競争論を主張した。それと同様に「進化論と社会と」でも、劣等者を「人為的に生存せしめて、人種全体の負担を重くする様な仕組」を減らして、優等者が活躍できる社会制度を作り、「個人間の競争の結果、人種全体が速に進歩する方法を取ることが最も必要である」と主張した。更に「進化論と社会と」は、「今日社会主義を唱へる人々の中には往々突飛な改革論を説く者」があるが、革命後も人間は生存競争を免れずに生活苦は続く」と主張した。

『進化論』に混在した第3の要素は、多数の人間を支配する有力な支配力をもつことや、生存競争の戦いを励まして「人種維持の目的」に役立つことなどを理由として、進化論とは論理的に対立する「現在の宗教」（「迷信」と同義）の保護を主張すると共に、「今後の宗教」には進化論と調和する資格を求めるという特徴をもつ。『進化論』1904年版の中で、第19章「進化論と宗教と」の一箇所だけは、「迷信」の保護や、「迷信」と進化論の調和を論じている（この主張の論理とその変化は、4章で詳細に検討する）。

まとめとして、『進化論』は、学者に仮説的理論を論じるよりも、一般の人々に向けて、各生物が歴史的に変化してきたという「進化の事実」と、この土台の上に成立する自然界の一生物である人間も歴史的に変化してきたという「人間の位置」を普及することを目的に定めた。『進化論』の枠組み全体に一貫する第1の要素は、二系

統の自然史論に支えられた「進化の事実」と「人類の位置」に関する知識を一般の人々に普及すると共に、その知識を認識するものの見方(視座)を養い、更に、人間の位置を認識するものの見方(人間観)を変革するという特徴をもつ。『進化論』の一部分に見られる第2の要素は、人種や国家などの「全団体の維持繁栄」を目的に定めた生存競争論を重視するという特徴をもつ。特に、日露戦争中に丘が生存競争論に基づいて主張した武力戦争の擁護や、「人種全体」の「進歩」をめざす優生学論や、社会主義批判などは、そのまま論理を展開し続ければ、帝国主義を擁護する社会ダーウィニズムに通じていく可能性を秘めていた。『進化論』の一箇所に見られる第3の要素は、進化論と矛盾する「迷信」の保護を主張すると共に、「今後の宗教」には進化論と調和する資格を求めるといった特徴をもつ。第3の要素は、自然史の中で生物の歴史的変化を考える進化論によって、「神」の名前で人間を含む各生物の永久不変性を強調する「不変の説」や、特定の人間を神格化する人間観のような「迷信」を批判する第1の要素と、日露戦争中に「全団体」の維持に役立つ「迷信」を保護する第2の要素の妥協策といえる。

3. 読者のさまざまな批評

本章は、3つの要素が同時に混在していた『進化論』を読んだ人々が発表したさまざまな批評を3つに類型化することによって、『進化論』の3つの要素と読者の各批評の対応関係を考える。作品が、作者の意図から離れて意味が次第に変化しながら、読者の誤解や新たな解釈が加わることによって多様に継承されることを古典の価値の一つということもできる。そして『進化論』は、読者の問題意識と時代状況に規定されてさまざまな批評を生みだしてきた。本稿が扱う批評の範囲としては、『進化論』(1904年版～1940年版)を戦前に読んだ読者を対象とする。

最初に、計25の書評を集めた「進化論講話に

対する世評一斑」(1904年1～4月)を対象にして、『進化論』の公表直後に同時代人が注目したポイントを押えて、同書がベストセラーになった理由を考える。本稿は、25の書評の共通点がある程度集約している堺利彦の書評を挙げた上で、各書評を整理していく。

第1に堺は、難しい専門書や洋書以外には系統的な進化論を理解できる作品が少ない所に、一般の人々むけに『進化論』が出たのは「正に時機に投じた供給である」と評価している。堺と同じように、計25の中で17の書評が、学者よりも一般の人々に進化論を普及する問題設定を評価している。例えば加藤弘之は、「進化論の大意を通俗的に講話された手際と云ふものは実に上手なもの(中略)ヘツケルの自然造化史を今一層平易に説くから素人にも大抵解らぬことはない」と評している。『太陽』も、「動植物学の知識少なき人々にも進化の理を了解せしむる」と評している。服部廣太郎は、「此書を読んで進化論の何物たるかを了解し得ないものは恐く愚者に非ざれば狂者であらう」と、やや微妙な表現を用いながら『進化論』がもつ分かりやすい説得力を評価している。

第2に堺は、『進化論』が「進化論を大体の丸呑みばかりでなく稍委しく筋を立て、知りたいと云ふ需要」にかなりの程度応えたと評価している。同時代人が特に注目した箇所として、15の書評が「人類の位置」とそれに基づく丘の人間観が旧思想に変革を及ぼす点に注目している。例えば『植物学雑誌』は、「第十八章は自然における人類の位置に就て間々放胆なる筆法を交へ進化論の必然的結果たる人猿同祖論を細説せる(中略)多数の一般読者より多大の興味を以て迎へらる、(中略)進化論に依て自然における人類の位置を開明し来る時は哲学社会倫理宗教等に対する吾人の思想態度も従て一大変革を免るゝ能はず」と評している。『東京朝日新聞』や『毎日新聞』も、「進化の事実」という土台の上に「人類の位置」が成立する枠組みを大まかに

読み解いて書評をしている。

第3に塚は、800頁を1日で読ませる「引力」をもつ丘の文体の力を、次のように高く評価した。「特に此に世間に推薦したいのは丘氏の文章である専門学者の文章と云へばマズイものに極つた様に見られて居るが此著者のだけは実に流暢で平易でそして趣味の多き言文一致の好文字をなして居る（中略）八百頁を一日二日に読み了らしむる丈の引力を持つて居る予は実に一日に之を読み了つた」。計25の書評の中で、丘の文体を評価する場合に多用された言葉を列挙すると、「言文（一致）体」や「口語体」や「談話体」という言葉は10個所使われている。「通俗」という言葉は9個所使われている。「平易」や「平明」という言葉は8個所使われている。「流暢」や「流麗」という言葉は7個所使われている。例えば桑野久任は、「通俗科学書として見る時は（中略）（一）言文体を採用せる事（二）引用の豊富なる事（三）比喩の卑近なる事（四）大体に通ずるを主とし細説には拘はらず小六ヶ敷事をぬきにしたる事（中略）実に愉快なり」と、アマチュアが進化論を理解できるように工夫した丘の文体を評している。

丘の文体は、一方では、会話のように流れるリズムに乗せて科学を伝える説得力があった。例えば『新人』は、「全文極めてわかり易き言文一致体を以てすらすらと書いてあって難渋なる専門的の文字は一切ヌキにし仮令生物学の素養なき人々にても容易く進化の大原理の何物なるかを会得する」と評している。丘の文体は、他方では、通俗的な談話体で読者の好奇心を刺激する力もあった。例えば『万朝報』は、「文章流麗にして比喩巧妙なること所謂学者の筆に似ず面白き進化論を面白く講話し得て遺憾なし」と評した。ただし桑野が、『進化論』を学校教材に使用できるようにして「迷信の生えざる如き土地を拓く」ために、「人は獣類である」を「人は哺乳類の一」という言葉に直して、「猥りに毒つくやう」なパリの獣姦話を削除する改良案を述

べたように通俗性をたしなめられる点もあった²⁸⁾。後に丘は、獣姦話を削除する。

『進化論』は、「広く進化論を普及せしめたいとの精神」に基づいて、学者よりも一般の人々に「進化の事実」と「人間の位置」を普及することを目的に定めて、進化論を口語体で分かりやすく講話する方法を実行した。後年丘は、1904年当時の学術書は、「悉く漢文口調のむづかしいものばかりで、口語体のものは一冊もなかつた。本書〔『進化論』〕に往々文語擬ひの鶴的な所があるのは全く初めての試み」だったと回想している²⁹⁾。丘の問題設定は、一方では、数万人規模で進化論に関心をもつ一般の人々の知的好奇心を満たすことに成功した。ただし他方では、やや浅薄な作品と評されることにもなった。例えば山本宣治は、「科学的宿命論の傾向著しき著作、明治大正思想史上重大なる代表的作品、『進化論の一夜漬をなす為には世界に比類無き良書』（三宅驥一博士）」と評している³⁰⁾。

次に、『進化論』を読んだ人々が発表したさまざまな批評を、丘の進化論を受容して視座が変化したと語った第1のタイプ、丘の生存競争論を批判した第2のタイプ、丘の進化論と国体論を調和させようと試みた第3のタイプに類型化していく。読者の各批評を読み解く前提として、丘は、ヘッケルの通俗的な生物哲学書を、「半ば座談的に書いてある故に読む者は少しも退屈感を感じぬ、議論の立て方を嚴重に吟味したら恐らく其所ら中に隙間だらけであらうが、隙間の無い様な書き方の議論は、誰も我慢して読む者は無からう」と評している³¹⁾。丘のいう「隙間」とは、作者が自覚的に曖昧さを残した文章を、読者が誤解を含めて多様に解釈するということ、つまり、作者と読者のコミュニケーションにおける作品の変化を自覚して認めるということの意味するのではないだろうか。実は『進化論』も、大学の学者が学術用語で論じた体系的な理論と論拠を、専門家が厳密に検証する専門的な学術論文

ではなくて、丘が日常会話風に書いた分かりやすい文章を、専門外の読者が「隙間」の多い丘の言葉や思想を多様に解釈したり、読者自身の思想を投影して考えたりしやすい通読的な科学書である。つまり各批評は、丘の思想に対する批評であると同時に、丘を通じて浮かび上がる読者自身の思想の表明でもある。

第1のタイプは、『進化論』の第1の要素と対応する「人類の位置」に関わる個所に注目して、「進化の事実」と「人類の位置」に関する知識を学ぶと共に、その知識を認識するものの見方に変化が生じた読者である。第1のタイプの読者には、丘の進化論を受容して視座に変化が生じることによって、既成の権威を否定する思想に入りやすくなる可能性や、天皇の神聖性を相対化する可能性が生じた。

1904年に19歳の大杉栄は、『進化論』を一晩で読んで、「周囲が明るくなる。自分が急に大きくなった」経験をした。大杉は、丘を「興味深い通俗な筆致」で「科学と人生」という主題を公開した日本科学界における「殆んど唯一の科学思想普及者」と位置づけて、丘の「忠実な弟子の一人」を自称した。更に大杉は、丘を通じて進化論を知った者が「僕等青年の間に幾千幾万あるか知れず」、博士から教師までを含む読者層を通じて、丘は「来るべき次世代の無数の青年までにも其の影響を及ぼしている」と、「僕等自身の此の啓蒙」経験を語った³²⁾。大杉は、『進化論』を受容して視座が変化した自分の経験を次のように語った。

実に愉快だった。読んでいる間に、自分のせいがだんだん高くなって、四方の限界がぐんぐん広がって行くような気がした。今までまるで知らなかった世界が、一ペエジごとに目の前に開けて行くのだ。(中略)自然科学に対する僕の興味は、この本ではじめて目覚めさせられた。そして同時に、すべてのものは変化するというこの進化論は、まだ僕の心

の中に大きな権威として残っていたいろいろな社会制度の改変を叫ぶ、社会主義の主張の中へ非常にはいりやすくさせた。「なんでも変らないものはないものだ。古いものは倒れて新しいものが起きるのだ。今威張っているものがなんだ。すぐにそれは墓場の中へ葬られてしまうものじゃないか³³⁾」。

田中美知太郎は、「忠君愛国の教育」を受けた少年時代は、自分用の天皇の写真を祭っていて、行幸で馬車が来ると「背中を通じてぞつとしたやうな感覚が走り、最敬礼のうちに陛下のお顔をみるどころではなかつた(中略)一種の宗教経験に似てゐる」と感じる、「多少熱烈な忠君愛国の徒」だった。1916年に14歳の田中は、『進化論』を一気に読んで、「少年の夢が破られる」ことになった経験を次のように語った。

〔『進化論』は、〕わたしたちの世代の共通経験みたいなものであつて、多くの人たちがこの書物の与へた衝撃的な印象を語つてゐる。(中略)今まで見なれてゐた周囲の世界が、すっかり様相を変へてしまつた(中略)少年のわたしを十九世紀以来の一種革命的な世界思想に接触させたのは、この『進化論講話』にほかならない。これは真に独創的な書物であつて、進化論の単なる紹介ではなく、進化論的な考へ方そのものを、証拠と推論によって、実地に教へてくれた³⁴⁾。

1935年に14歳の鶴見俊輔は、天皇の神聖性を強調する歴史観が説かれはじめた時代に、『進化論』を読むことによって、ホヤから人間に至る「ひとすじの道」(自然史)をたどって歩いた経験を次のように語った。

昭和十年ころ、私がこの本を読んだ時には、天皇が神であることが、もう一度説かれはじめた時代だったので、この本をたよりに、ホ

ヤヤカギムシから人間に至るひとすじの道をたどってゆくことは、国家のあたえる地図とはちがう一枚の地図を手にして歩くことを意味したのである。(中略)『進化論』と『共和国』は、私にとっては、この世の中が系統的にわかってきたという体験をもたらした。マルクスの著作を読むことで開眼したという人の体験をよくきくが、私にとっては、丘浅次郎の二冊の著作が世界を合理的に理解しようとする努力の出発点となった³⁵⁾。

「『紀元は2600年』と高らかに歌われて」、「太平洋戦争への暗雲が垂れ込んでいた」1941年前後に、20歳の織田秀実は、「皇国教育」の歴史で習う「天孫降臨」と生物学の「中生代の恐竜」の矛盾に不思議を感じる中で、『進化論』や『共和国』を「むさぼるように次々と読んでいった」。その結果織田は、「生物の長い歴史の途中で恐竜の時代があり、それから続いて哺乳類の時代となり、人間が存在することが認識でき、『天孫降臨』は別の次元のものであることがはっきりした」という³⁶⁾。

以上の各批評をふまえて、『進化論』を読んだ読者の「共通経験」の特徴を考える。800頁を一日で読ませる「引力」をもつ文体の力や、「科学と人生」という主題にひかれて、『進化論』を数日で一気に読んだ読者は、「進化の事実」という土台の上に成立する「人類の位置」に関する知識を学ぶと共に、その知識を認識する科学的なものの見方そのものを学ぶプロセスの中で、視座に変化が生じた。例えば、田中が「進化論的な考へ方そのもの」を学んで「革命的な世界思想」に触れたと語り、更に「われわれの年代の人がよくいうのは、丘浅次郎の『進化論講話』これを読んで非常に感銘を受けた。いわゆるそれこそ目のうろこが落ちたというか、ものの見方がすっかり変わるくらい非常に感銘ある本です」(『丘浅次郎著作集』付録の宣伝広告文。以上、傍点-引用者)と語ったことは、視座に変革が

生じた実例といえる。丘も、進化論の普及によって起こる人間観と視座の変革を、「思想変遷の上からいへば、地動説に比べて遙に著しい革命である」と強調している³⁷⁾。大杉は、自然史の中で万物の歴史的变化を考える進化論を受容して、周囲が明るく、自分が大きく、四方が広くなり、未知の世界が開けると共に、既成の権威を否定する社会主義に入りやすくなった。田中は、「進化論的な考へ方」を学んで、世界が変化すると共に、宗教的な天皇体験に感応する「少年の夢」が破られた。鶴見は、天皇の神聖性が説かれる時代に、自然史の道という「一枚の地図を手にして歩く」経験を「世界を合理的に理解しようとする努力の出発点」にすると共に、天皇の神聖性を相対化した。織田は、太平洋戦争直前に、恐竜の時代から哺乳類に至る自然史の中で人間を捉えると共に、「天孫降臨」から「紀元2600年」に至る「皇国教育」の虚偽性を自覚した。四人が経験した視座の変革(革命)は、眼前の現状を固定的に捉えることなく自然史の中で歴史的に認識する歴史観、人間を自然界から区別することなく自然界の一部として認識する自然観、ある特定の人間を神聖視することなく万人を同等の一生物と認識する人間観などが組み合わさる「人類の位置」から出発する丘の思考が受容された実例である。更に『進化論』は、読者が既成の思想とは異なる思想に架橋する橋渡しの役目も担ったと位置づけられる。

第2のタイプは、『進化論』の第2の要素と対応する「進化論と社会と」や第20章に関わる個所に注目して、日露戦争前後の時期に丘が主張した生存競争論の問題点を批判した読者である。

「日露戦争の翌年春」に23歳の北一輝は、生存競争論に基づいて武力戦争の擁護や優生学論や社会主義批判などを主張した「進化論と社会と」(2章)の叙述の大部分を引用して、「異人種異国家間には永久に戦争は消滅せず世界一社会となる社会進化の将来を空想なりと云ふ法螺的国家学」と批判した。特に北は、国家間競争が「連

邦議会の議決に進化」して、更に「連邦間の競争は全く絶滅して人類一国の黄金郷」にまで進化すると捉える社会進化論を肯定する立場から、「魔界の人の如き暴言」を述べた丘には、生存競争の単位が進化する社会進化論の考えが無いと批判した。その上で北は、生物進化を考える進化論者が、「進化の途上」にある人種と国家を「永久に生存競争の単位」として固定化して、「社会主義の万国平和の理想」を非難すれば、「誠に世の導きたるべき科学者が却て世に随伴するを事とするの傾倒」になってしまうという矛盾を指摘して、丘を「革命によりて得べき世界連邦論を軽侮して不靈残忍なる帝国主義の讚美者となれり」と批判した³⁸⁾。

石川三四郎は、『進化論』1905年版を読んで、丘の生存競争論が優勝劣敗を絶対視する「近代文明」によって、「土民生活」を破壊する「自然の征服」を理想化したと批判した。「無政府主義の聖者クロポトキンの力説した」相互扶助を重視する石川は、近代の生存競争論が人類を凶暴な野獣に化した世界史を「進化論の罪悪史」と捉えた。進化論の生存競争論すべてを否定する観点から石川は、丘の生存競争論も優勝劣敗を絶対視する「近代文明の一切である」と批判した。石川の根底には、「進化論、生存競争論が生まれて以来、文明人の理想は『自然の征服』『土民生活の破壊』にあつた」と批判する「土民生活」論があった³⁹⁾。

北と石川が丘の批判をした背景として、北は生存競争の単位が進化するという社会進化論の立場から、石川は生存競争を否定する相互扶助の立場から、丘が生存競争の単位を人種や国家に固定して戦争永続論を肯定した点や、丘が「個人間の競争の結果、人種全体が速に進歩する方法を取る」（「進化論と社会と」）と述べたように、個人間の生存競争を人種間の「進歩」と直結させて意味づけた点を批判したと考えられる。ただし本当に丘が、人種と国家を「永久に生存競争の単位」として固定して戦争永続論を主張し

続けたのかという論点と、生存競争によって生じる人類の変化を「進歩」として意味づけ続けたのかという論点は次章で検討する（以上、傍点-引用者）。

第3のタイプは、『進化論』の第3の要素と対応する「進化論と宗教と」に関わる個所に注目して、丘自身も主張したように、「我が帝国」は日露戦争で強固な結合を見せて、今後も忠君愛国に根ざしながら、「世界の大勢」と適応する進歩を達成できると主張した読者である。第3のタイプの読者は、ある政治的解釈を加えることによって、各生物の歴史的变化を核とする進化論と、天皇の万世一系を核とする国体論を調和させようと試みた。1907年に76歳の佐々木高行は、『進化論』や「戦争と平和」（1904年）を要約して、丘の側に立って考えてみても、進化論と「わが国体の尊厳」は調和しえると次のように論じた。

〔上下の階級をよく守る社会団体を組織した〕理想的幸福団体の国家は、今吾々の住んでおる、此の大日本帝国其物である。（中略）人類のうちでも、比較的一般生物界を遠ざかつて、高尚優勝なる上位を占めたのは、即ち此の大和民族を以て団結してある所の、吾が日本帝国である。（中略）〔進化学者（丘）の説に従って日本帝国が優れている理由を挙げれば、〕まづ進化学者は、生物団体といふ事を説いて、其団体の強固なるものは栄え、強固ならざるものは亡ぶといつてあるが、吾国家の結合は、如何にも強固で、如何にも確実である事は、世人の歴史を信ずる程度に於て、其歴史が証明してあるではないか。（中略）他国の陵辱を受け、到底忍ぶべからざる時にあたりては、百鍊の鐵よく胡氣を減さんければ止まぬといふ意気の存して居ることは、遠く元寇襲来の時、近く日露戦争の際に於て歴々見ることが出来るではないか。（中略）時勢の変遷につれては、固定せる一個の忠君、愛国の基礎の上に立つて、改良進歩の変化を累ね

て、世界の犬勢に適應せる進歩發展を成し遂げ、飽くまでも採長補短の国是を実行する（中略）凡この世界に存在する生物中、人類がその最高位を占めて居る（中略）その人類中、わが大和民族が最優勝者であつて、有史以来、我が古伝統によつて、其大和民族中、最もすぐれて尊いものが、我が御祖の神であると確信するのである。夫故わが国体の尊嚴なることに對して、進化論は決して支障となるべき筈のものではないと断言するのである⁴⁰⁾。

ここで佐々木は、丘の側に立って考えると自称しながら、生物界で万物の靈長という最高位を占める人類の中でも、「我が御祖の神」をもつ「わが大和民族が最優勝者」であり、更に「大和民族を以て団結してある所の、吾が日本帝国」が上下の階級をよく守る社会団体を組織した「理想的幸福団体の国家」であると強調している。しかし、生物界と人間界を区別して、生物・民族・国家などによる重層的な序列化をはかることによって、万物の靈長と捉えた人類や階級制度のある日本帝国を権威化した佐々木の論旨と、「人類の位置」から出発して、人間を自然界の一部分として認識する自然観や、自然史の中でいかなる階級や身分の人間でも同等の一生物に過ぎないと認識する人間観に帰結していく丘の思考は、まったく正反対のものである。それでは佐々木は、一体なぜこのような解釈をすることが可能になったのだろうか。もちろん佐々木はそれを語っていないが、それを考える手がかりになるのが、「進化論と宗教と」である。「進化論と宗教と」に登場する「現在の宗教」と「今後の宗教」という言葉を、「現在の国体」と「今後の国体」という言葉に読みかえることが可能であるならば、日露戦争中に丘は、多数の人間を支配する支配力をもつ現在の国体を保護することによって、生存競争の戦いを励まして「人種維持の目的」に役立てて、更に進化論と調和する資格を今後の国体に求めたと解釈することもで

きる。佐々木が言及した「戦争と平和」（1904年）も、日露戦争開戦にふれて人間は生存競争を免れないと述べて、「大多数の人々の安心立命のためには宗教もはなはだ必要である」と論じている⁴¹⁾。つまり佐々木は、「進化論と宗教と」や「戦争と平和」の中にかいま見える丘の第3の要素に注目して、それを強調することによって、「我が帝国」は日露戦争で強固に結合することに成功して、今後も忠君愛国に根ざしながら、「世界の犬勢」と調和する進歩を達成することができるかと主張したのではないだろうか。少なくとも、佐々木の政治的解釈を交えた創作を可能にする条件となりえる箇所と論理が、1904年の丘の中には混在していた。

3つの要素が混在していた『進化論』は、影響力が大きくなると同時に評価も定めにくくした。次章では、各批評の3つの類型と、『進化論』に混在した3つの要素の対応関係とその変化の構造を論じる。

4. 3つの要素の混在とその変化の構造

4.1 3つの要素の混在とその変化

本章は、『進化論』各版の叙述を比較することによって、1904年版では丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの相反する要素が混在していたことと、1914年版では3つの要素が変化したことを明らかにする。

進化論の普及に関する丘の認識を比較すると、1904年版と1911年版は進化論を普及すれば「学説の大革命」や「思想界の革命」が起こると楽観的な見通しを語っていたが、1914年版は次のように急に悲観的な見通しになる。「西洋諸国の大小幾十通りも通俗書があつて、小僧でも職人でも小学枚さえ卒えた者ならば、誰でも進化論の大要を容易に知り得るのに較べると（中略）我が国における進化論の普及の程度が、外国に比して未だ大いに及ばぬことは明らかである」⁴²⁾。3年間に一体何が起こったのだろうか。この丘の変化を念頭に置きながら、『進化論』に混在した

表1 『進化論講話』の第19章と第20章に混在していた3つの要素とその変化の一覧表⁴³⁾

| 1904年版 | 1914年版 |
|---|---|
| <p>【第1の要素】</p> <p>①「西洋諸国では耶蘇教が行はれ（中略）人間だけを一種 靈妙なもの思うて居た所へ、生物進化論が出て、人間は 獸類の一種で、猿と共同な先祖から降つたものであると 説いた（中略）〔キリスト教は進化論の弾圧を試みて、 次は宗教と進化論の調和を模索したが、今日はそれも無 理になったが、〕 今後は段々教育も進み、学問が普及す るに随うて、進化論の解かる人も追々殖えるに違ひない 故、宗教の方も進化論と矛盾せぬものでなければ、教育 ある人々からは信ぜられなくなつて仕舞ふ」。</p> <p>②「進化論の影響する所の極めて広いこと、人間という考 に基づいた学科は、悉く其ために研究法を改めなければ ならぬことなどは、以上の例だけによつても略明に解か るであろう。（中略）教育の進むに随ひ、進化論の弘ま るは無論である。されば、各方面の学科が進化論によつ て大に改まるのも、決して遠い來來のことではない。現 に今日でも、既に進化論に従うて改革を試みた書物が、 哲学・心理学・倫理学・教育学等の方面にも何冊づゝか 出版せられてある〔出版物は今から起こる大變革の端緒 とされる〕（中略）人間が獸類の一種であるといふ考は、 人間自身に直接に関係することで、旧思想を基とした学 説は総べて此ために大改革を要することになる故、人間 の思想變遷の上からいへば、地動説に此べて遙に著しい 革命である。今日はまだ此革命の初期に過ぎぬが、生物 進化論は既に學術上の事實である故、早晚地動説と同じ く世間一般に之を認めるに至るべきは疑ないことで、其 時に至れば、旧思想に基づいた学説の大革命は素より避 けることは出来ぬ」（この1904年版の②の叙述は、1910 年版でも若干叙述が変化するが、基本的に意味は変化し ない）。</p> <p>【第2の要素】</p> <p>①「宗教といふものは現在行はれて居るもので多数の人間 は之によつて支配せられて居る有様故、人種の維持繁栄 を計る点からいうても、決して等閑にすべきものではない。（中略）生存即競争と諦めて勇しく戦ふ様に励ます といふ性質の宗教が最も必要であらう」。</p> <p>②「進化論から見れば社会改良も矢張り自己の属する人種 の維持繁栄を目的とすべきものである（中略）〔戦争全 廢論や世界連邦論は生物学上無理であり、〕 利害の相反 する団体が並び存して居る以上は其間に或る種類の戦争 が起るのは決して避けることは出来ぬ。（中略）人種生 存の点からいへば、脳力・健康ともに劣等なものを人為 的に生存せしめて、人種全体の負担を重くする様な仕組 を成るべく減じ（中略）〔優等者が活躍できる社会制度 を作って、〕 個人間の競争の結果、人種全体が速に進歩 する方法を取ることが最も必要である」。</p> | <p>【第1の要素】</p> <p>①この叙述は変化しない。</p> <p>②「伝來の旧思想の大部分が進化論のために絶大な影響を 受けて、ほとんど根底から變動するを免れぬ（中略）進 化論の如き思想界に大革命を起こすべき性質の知識が、 幾分か読書人の社会に普及して、文芸に従事する人々の 間に広まると、直ちにその作品の上に変化が現われるゆ え、新しい思想が存分速やかに世間一般に広がるよう になる。最近二、三十年間に、西洋諸国で著わされた有名 な小説や脚本の中には、従來の宗教的信仰や社会の風習 を全く無視し、もしくはこれに反抗した形跡のあるもの がすこぶる多数を占めているが、これはよほどまでは進 化論の確かになったために、在來の宗教の權威が薄らい だ結果と見なすことが出来よう。今日の青年はかような 本を読むゆえ、自然と、旧時代の信仰や伝説に対して、 無遠慮な批判を試みる（中略）知識の進歩に伴って、時 代の思潮がだんだん移り行くのは自然の勢いであって、 人力をもってこれを押し戻すことはとうてい不可能であ るう」（1914年版では、1904年版の第20章全体が大幅に 縮小されて、②の叙述が唯一残った。ここでは意味がほ ぼ対応する叙述を挙げた。第1の要素の意味はやや強化 された）。</p> <p>【第2の要素】</p> <p>①この叙述は変化しない。</p> <p>②この叙述は変化しない。北一輝は、②の叙述のほとんど を引用して、丘を「帝國主義の贊美者」と批判した。</p> |

③「人為的に自然淘汰の働きを止めて居た如き制度は全く廃して、知力・健康ともに優れたものは必ず勝ち、劣つたものは必ず負ける様な仕組に改めなければならぬ。斯くすれば自己の属する人種の進歩改良は自然に行はれ、他人種との競争に当て勝つべき見込みは益々多くなる」(この優生学論の叙述が、1905年版と1911年版でも変化した点に関しては、後述する)。

【第3の要素】

- ①「単に理解力の標準から見れば、現在の宗教は総べて迷信であるが、迷信は甚だ有力なもの故、自己の属する人種の益々栄える様にするには、此方針に矛盾する迷信を除いて、此方針と一致する迷信を保護することが必要である。(中略) 学問を修めた者には、特に宗教の必要はないが、学問などを修めぬ多数の人間には安心立命のために何か一つの宗教が入用であらう。(中略) 甚だしい迷信ほど信者の数が多く(中略) 世の中から迷信を除くことの出来ぬは明であるが、迷信が避けられぬ以上は、人種維持の目的に適する迷信を保護するの外には道はない」。
- ②「理学上の確な学説と矛盾する様なことを説かず、厭世主義に陥らず、智者は智者だけに、愚者は愚者だけに、之を了解して安心立命を得るといふことは、今後の宗教に必要な資格であらう」。

③この叙述はすべて削除される。

【第3の要素】

- ①「単に理解力の標準から見れば、現在の宗教は総べて迷信であるが、迷信は甚だ有力なもの故、自己の属する人種の益々栄える様にするには、此方針に矛盾する迷信を除いて、此方針と一致する迷信をしばらく保護することが必要である。(中略) 学問を修めた者には、特に宗教の必要はないが、学問などを修めぬ多数の人間には安心立命のために何か一つの宗教が入用であらう。(中略) 甚だしい迷信ほど信者の数が多く(中略) 世の中から全く迷信を除き去ることは容易でないが、迷信が避けられぬ以上は、人種維持の目的に適する迷信をしばらく保護するの外には道はない」。
- ②この叙述はすべて削除される。

注) 1914年版の第3の要素①の叙述で変化した箇所には下線を引いた。漢字や句読点の変化は無視した。表の作成にあたって、第1版1904年1月、第2版同年、第3版同年、第4版同年、第5版1905年、第7版1907年、第8版1909年、第10版1911年、第11版1914年11月、第12版1917年、第13版1925年、第14版1940年を確認した。ただし第6版と第9版は確認できなかった。表の引用文に関しては、1904年版の第1の要素②と第2の要素③を例外として、1904年版の叙述は1911年版までほとんど変化しない。1914年版の叙述は1940年版までほとんど変化しない。

3つの要素とその変化を比較した一覧表を挙げよう。

1つ目に、表1左の1904年版の叙述を検討すると、丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの相反する要素が混在していたことが指摘できる。第1の要素は、一般の人々に向けて、「進化の事実」と「人類の位置」に関する知識を普及すると共に、その知識を認識する視座そのものを変革することによって、進化論と対立する「迷信」(「現在の宗教」と同義)を打破するという特徴をもつ。特に、自然史に基づいた「進化の事実」という土台の上に成立する「人類の位置」という問題から出発して、「人間は獣類の一種で、猿と共同な先祖から降つた」と認識する丘の思考は、「神

の名前で人間を含む各生物の「万世不変」を強調する思想や、特定の人間を神格化する人間観を論理的には否定する。丘は将来の見通しとしては、進化論の普及に伴い、「現在の宗教」を「迷信」と認識する智者が増えて愚者が減ることによって、「迷信」は衰退していくと予測した。この文脈と対応するように、丘の進化論を受容して社会主義に入りやすくなった大杉栄や、天皇の神聖性を相対化した田中美知太郎、鶴見俊輔、織田秀美などは、第1の要素に注目した。

第2の要素は、人種や国家などの「全団体の維持繁栄」を目的に定めて、それを達成するために、人種間や国家間の武力戦争を意味する生存競争に役立つ「迷信」を利用すると共に、進化論で

帝国主義を擁護するという特徴をもつ。特に、日露戦争中に丘が、「人種の維持繁栄を目的」に定めて生存競争の戦いを励ます「迷信」の保護を主張した「進化論と宗教」と、生存競争論に基づいて武力戦争の擁護や優生学論や社会主義批判などを主張した「進化論と社会と」を合わせ読めば、丘は帝国主義を擁護する社会ダーウィニストになりえる。この文脈と対応するように、日露戦争中に丘が主張した生存競争論を批判した北一輝や石川三四郎は、第2の要素に注目した。

第3の要素は、少数の智者には「進化論」（第1の要素）を了解させて、多数の愚者には「迷信」（第2の要素）を了解させる知のダブルスタンダードを使い分けることによって、衆愚を支配する「迷信」を保護して人種の維持に利用すると共に、「今後の宗教」には進化論と調和する資格を求めるという特徴をもつ。特に、有力な「迷信」の除去は不可能なので「人種維持の目的に適する迷信を保護する」という現状への追従や、「今後の宗教」には進化論と調和しながら愚者に安心立命を与える資格を求める姿勢などが妥協点になる。この文脈と対応するように、解釈を加えて進化論と国体論を調和させようと試みた佐々木高行は、第3の要素に注目した。

2つ目に、表1右の1914年版の叙述を検討すると、進化論と対立する「迷信」を打破する第1の要素が強化されて、第2と第3の要素が縮小されたことが指摘できる。進化論を普及すれば「従来の宗教的信仰や社会の風習」に反抗する文芸作品が多く現れて、知識の進歩に伴い時代思潮が変化する「自然の勢い」が勝つという、第1の要素の強化を意味する宣言が追加された。1914年に丘が挙げた文芸作品が一体何を示唆していたのかという問題は後述する。その逆に、「迷信をしばらく保護する」（傍点-引用者）という叙述が二箇所追加されたことは、「迷信」を保護する限定条件の追加や、「迷信」を保護し続けると不利益が生じるという懸念の追加を意味する。

そして更に、知のダブルスタンダードや、「今後の宗教」に進化論と調和する資格を求めた叙述の削除は、第3の要素の大幅な縮小を意味する。それと符合するように、丘は『進化論』や「戦争と平和」以後は、「迷信」の保護や進化論と「迷信」の調和をまったく主張しなくなる。

第2の要素の支柱となる生存競争論の内容も変化していく。2章では、『進化論』1905年版における生存競争論の問題点を指摘したが、その問題の焦点となった丘の優生学論を時期区分してみよう。第1期は、『進化論』1904年版から1911年版まで、丘が優生学を重視した時期である。1911年に丘は、実行すれば疑いなく国民を改善することができる優生学は、「今後の列国競争場裡に独立の国民として立ってゆく（中略）わが民族の将来にとって重大な影響を及ぼすべき学問であると信ずる」と強調した⁴⁴⁾。若干の変化も見られる。1911年版では、前掲した1905年版の優生学論がすべて削除されて、同じ箇所には次の叙述が追加される。「現今の社会では門閥財産等の関係から、身体も弱く精神の痴鈍なものも安楽に成長し、盛に子孫を遺すべき仕組に成つて居る故、民種改善学の理想とする所とは正反対の状態に在る。（中略）〔社会不適応者には断種や結婚制限を実行して、〕自己の種属の繁栄を図ることは今日の急務である」⁴⁵⁾。

第2期は、『進化論』1914年版から「優生学の実際価値」（1920年）まで、丘が優生学を疑って距離を置き始めた時期である。1914年版では、1905年版や1911年版に登場した優生学の叙述がほとんど削除される。ただし、2章で挙げた「進化論と社会」の優生学論はすべての版に残り続ける。1916年に丘は、「『知っていることは何の役にも立たず、役に立つようなことは何も知らぬ。』と言うたファウストの歎息はそのまま人種改良学者等の最後の歎息となる」が、「わが民族を維持」する応急処置としては優生学を実行する必要があると論じた⁴⁶⁾。1920年9月に丘は、今日「盛に唱導せられ」る優生学を研究して実行

すれば「一定の効能がある」が、人間の退化を防ぐことはできず、その結果も「或狭い範囲内に限られてあつて、根本的に良くするといふことはどうも望みがない」と論じた⁴⁷⁾。

第3期は、1920年9月以降に、丘が優生学をまったく論じなくなる時期である。丘は、1925年前後に日本優生学協会や日本優生運動協会が創立されて、優生学の研究体制が整備される動きにも参加しない。その逆に、1920年代に丘は、生存競争論の単位を、人種間や国家間の武力戦争から、植民地の民族独立運動や国内の階級闘争（「人為階級間の戦い」）へと読みかえて、人民が階級闘争の果てに君主勢力を打倒して共和国が出現する人類史を描いた⁴⁸⁾。つまり、1914年頃から1920年代にかけて、優生学や武力戦争を重視する生存競争論を柱にして社会ダーウィニズムに通じる可能性を秘めていた第2の要素の内容は、変化していったと位置づけられる。

4.2 「迷信」論の意味

各版の比較を通じて明らかになった3つの要素の混在とその変化をふまえた上で、丘が論じた「迷信」（現在の宗教）は、字面どおり西洋や日本のキリスト教のような具体的な宗教を意味したのか、それとも、近代日本では直に公言することのできない特殊な権力を意味したのかという重要な論点を考える。

『進化論』のすべての版は、「宗教というもの^レは現在行はれて居るもの^レで多数の人間は之によつて支配せられて居る有様（中略）現在の宗教は総て迷信である」（傍点-引用者）と論じている。1914年版の「現在の宗教」は、「伝来の旧思想の大部分」、「従来の宗教的信仰や社会の風習」、「旧時代の信仰や伝説」などにも広く言い換えができる。つまり、「迷信」や「旧思想」と広く言い換えができる「現在の宗教」は、1904年（一部は1914年）から1940年までの日本社会において圧倒的多数の人間を支配し続ける支配力をもっていたと同時に、「従来の宗教的信仰や社会

の風習」でもあった「甚だ有力」な最高権力を意味する。しかし、近代日本のキリスト教徒の総数は人口の1%に達しないまま推移したので、丘の指摘は歴史の実態とは大きく食い違う。1904年に『進化論』を読んだ読者の反応としても、丘のキリスト教批判は、「日本では的なきに矢を放つ」という疑問も多く寄せられた⁴⁹⁾。

それでは丘は、「迷信」を一体どんな意味で使用したのだろうか。『進化論』のすべての版は、西洋の自然科学者がキリスト教の「宗教上の迷信」といかに向きあい、進化論を一般の人民にどのように普及したのかを次のように論じている。ダーウィンは、『種の起源』（1859年）では、「其時の世の有様を考へて」宗教的権力の批判を防ぐために、人間の先祖の議論を避けながら生物進化論と自然淘汰説を広く普及した。進化論を受容する社会的基盤を築いた上でダーウィンは、『人の先祖』（1871年）で、「人間も他の獣類と先祖を共にするもので、猿の類から分かれ降つた」と段階的に公表した。それと比べてハクスレーは、『自然における人類の位置』（1863年）で、「人間と猿とは同一の先祖より降つた」と直に公言して「宗教上の迷信を遠慮なく攻撃」したために「攻撃的」となった⁵⁰⁾。丘は二人の経験から、宗教的権力と向きあいながら進化論を人民に普及する戦術を学び、それを丘自身の活動にも活かした可能性がある。つまり丘は、近代日本の「世の有様を考へて」、多数の人々を支配している「宗教上の迷信」の批判を公表して「攻撃的」となることを防ぎながら、進化論を普及する戦術を選ぶことによって、進化論を一般の人民に広く普及したのではないだろうか。『進化論』の第1の要素の論理から考えれば、「迷信」は、「神」の名前で人間を含む各生物の「万世不変」性を強調する「不変の説」や、特定の人間を神格化する人間観を意味する。それと同様に、近代日本の「迷信」も、「万世不変」の永久不変性を強調する思想や、特定の人間を神格化する人間観を意味する。

私は、『進化論』と丘の評論を合わせ読むことによって、丘の論じた「迷信」が、近代日本の多数の人間を支配して、「宗教的信仰や社会の風習」でもあった「天皇制」を暗示していたと読み解くことができれば、論理の道筋が通ると考える。

先ず、1913年頃の時点で、丘のいう「迷信」が「天皇制」を意味していたということと、その背景には『進化論』の第1の要素と「天皇制」の矛盾が顕在化する契機があったということがいえる論拠をあげよう。実は、「“皇国史観”の神話教育と矛盾する」丘の進化論に対して、宮内省から「一般の国民は、神話教育によってりっぱな人間にそだっているのだ（中略）触らぬ神に祟りなし」（天皇に抵触する問題を考えずに自粛しろ）という警告が出た直後に、丘は「触らぬ神の祟り」（1913年1月、執筆は前年11月、以下、「神の祟り」と略称する）を公表している。宮内省の圧力で免職になりかけた丘は、「さわらぬ神に祟りありだ。日本はこのようにして今日、『日本書紀』の神話の神々にさわることを許さないで、人間のことも科学的に研究しないで、科学的な精神をこのようにして、おさえつけてしまったらば、必ずや、その祟りを受ける」と東京高師の学生に語ったという。1912年頃に顕在化した宮内省や記紀神話に抵触する人間の科学的研究とは、『進化論』が自然史という枠組みの中で論じた「人類の位置」に他ならない。

「神の祟り」は、中世西洋の仮想国を批判するように偽装しながら、現在の日本を暗に批判するレトリックを駆使することによって、「天皇制」という言葉を一言も使わない「天皇制」批判を試みる。

一方で丘は、「天皇制」を暗示する「強制信条中の迷信」に関しては、国の最高権力者が、神話と歴史を利用することによって「製造」した神を、「あらゆる方法を用いて、強制的に人民に信ぜしめ」、その逆に、神と抵触する思想（丘の進化論もその一例）を弾圧することによって、

権力者の命令を正当化する人工的な支配システムとして描きだした。更に丘は、権力者が、ご真影礼拝、君が代斉唱、教育勅語奉読式などを暗示する教育儀礼を利用して、「天皇制」（強制信条）を子供の頭に注入するイカサマを行うことによって、全国民の思考力の発達を抑制した上で、「神」の名前を借りて正当化した権力者の命令に絶対的に服従するように強制するという支配のシステムを、次のように描きだした。

強制信条なるものは、元来、権力者が自分の都合から割り出して選定したもの（中略）神様のおぼしめしによって汝らを司配する法王殿の御命令には絶対に服従せねばならぬぞ（中略）権力者はまず議論などをせぬ幼年時代からかような考えを頭の中へ注ぎ込んで、自然に全国民にかく信ぜしめようと企てる。すなわち子供の教育に従事する者どもに命じて、油絵の前にお辞儀をさせたり、讚美歌を歌わせたり、御経を読むあいだつつしんで立たせたりして、まだ何ごとをもわきまぬ頑是ない子供らに、始めから少しも疑いを抱く余地を与えぬようにと尽力する。（中略）強制信条でも、これに附随した造り話でもみな真実として教えるのであるから、実はteachするのではなくてcheatする（中略）教員をteacherと呼ぶのは実はcheaterという⁵¹⁾。

他方で丘は、「天皇制」（強制信条中の迷信）の要となる「天皇」（法王）に関しては、神格化されるために一人の「人間」として生きることすら死ぬことも否定された「一人前には通用せぬ人間」が、支配システムの道具として利用されることに対して、「ああお気の毒なと感ずる」感性を持っていた。丘は、「天皇制」の要となる「天皇」を、神ではなく一人の「人間」として認識する「常識」的な人間観を次のように論じた。「たとえ常識のある人でも（中略）強制信条中の迷信に対しては全く批評を許されない。（中略）法

王としても同じ人間である以上は人間共通の弱点を具えているであろう。特に大寺院の奥で競争を知らずに育てられたのであるから、普通の世間へ出したら、とても一人前には通用せぬ人間であろうなどは、常識のある人ならば誰でも考えそうなことであるが、三四百年前のヨーロッパでこのようなことを口に出したらおそらく命はなかったであろう⁵²⁾。ここで丘は、「天皇」を暗示する「法王」という対象を、世間の荒波にもまれて一人前の立派な人間として育つという意味あいをもつ「普通の世間」の生存競争を経る中で、「人間」として成長する経験を否定された「人間」として描いた。

「天皇」を神ではなく一人の「人間」として認識した「神の崇り」の「常識」的な人間観は、実は『進化論』に混在した3つの要素とその変化に深い関わりがある。先ず、「法王としても同じ人間である」と捉えた丘の認識の土台には、「人類の位置」という問題から出発して、長大な自然史の中で考えれば、いかなる階級や身分の人間でも同等の一生物に過ぎないと認識する人間観へと帰結していく第1の要素がある。次に、北一輝から今日まで、人種間や国家間の戦争永続論を肯定する生存競争論と批判されてきた第2の要素は、「神の崇り」では、「普通の世間」における個人間の生存競争の経験を否定された「天皇」を対象に定めた上で、その「天皇」を、支配システムの道具として神格化されるために、一人の「人間」として生きることを否定された「人間」という滑稽で憐れな存在として認識する内容へと変化している。最後に、「強制信条中の迷信」(天皇制)と進化論の論理的矛盾が顕在化した以上は、「迷信」と進化論の調和を模索する第3の要素は成立しがたくなる。

『進化論』の第1の要素は、神格化された「人間」が一人の「人間」として死ぬことを否定されるという考えも導きだす。丘は、「天皇」を暗示する人物の死後に、取りまきの人々が階級の高さを誇示する光景を次のように描く。「旧い人は死

んでも単に死んだとは言わず、階級によって一々用いる文字を区別し、新聞の広告にも必ずその文字を用いて、階級の高いことを示さずにはおられぬと見えるが、奴隷根性の退化した下級の者がこれを見ると、あたかも自分に泥をはねかけて走って行った自動車が堀に落ちたのを見て、ああお気の毒なと感ずるのと同じ種類のお気の毒さを感じずる⁵³⁾。奴隷根性(階級心理)によって神格化された人物を冷静に眺めた丘の認識の土台には、「人類の位置」という問題から出発して、長大な自然史の中で考えれば、偉人とは奴隷根性が造る産物であると認識する人間観へと帰結していく次のような思考がある。「下等動物から人間までに進化し来つた幾千万年間の歴史を背景として眺めれば、普通の人間と、所謂偉人との間の差の如きは、実に僅少なものである。それを非常に大なる相違である如くに思うて居たのは、奴隷根性を以て之に臨んだ故であつた⁵⁴⁾」。

以上をふまえて本稿は、丘が論じた「天皇制」を、権力者が、歴史的に変化する人間を万世一系の神へと神格化する記紀神話や、子供の思考力の発達を阻害して天皇制を注入するイカサマの教育(ご真影、君が代、教育勅語)などを利用することによって、「神」の名前で国家権力を正当化すると共に、人民に絶対的服従を強制する人工的な支配システムと定義する。

私は、「天皇制」を批判的に描いた丘の根底には、『進化論』の第1の要素の核となる「人類の位置」から出発する思考と共に、権力者が一人の人間を天皇に神格化して支配を正当化していく天皇制に対する軽蔑の情と、神格化された人間が死後までも支配の道具となって権力者やメディアに利用される天皇に対する憐憫の情があったと考える。基本的なこととして、天皇を神ではなく一人の人間として認識する以上は、不自然な神格化を否定する感性と共に、天皇の不自然な境遇に共感しながら、天皇が神ではなく一人の人間として生きる道を見いだす感性が必要なのではないだろうか。その感性がなけれ

ば、たとえ天皇制というシステムは否定できたとしても、天皇制を根底で支える心理までは到達できないのではないだろうか。

この「神の祟り」こそが、『進化論』1914年版に追加された第1の要素（特に「人類の位置」から出発する思考）に関わる叙述が示唆した「宗教的信仰や社会の風習」に反抗した文芸作品の具体例である。『進化論』の第1の要素と、「“皇国史観”の神話教育」や記紀神話の矛盾が顕在化した直後に、丘が、「強制信条中の迷信」という造語を駆使して、天皇制や天皇を暗に批判する「神の祟り」を公表したという具体的文脈こそが、1914年版の「迷信」が「天皇制」を意味したという論拠となる（以上、傍点－引用者）。換言すれば、『進化論』とは異なるテキストの中で、『進化論』の第1の要素と「迷信=天皇制」の矛盾をめぐる同じ問題がくりかえし論じられていた。

次に1920年に丘が語った時代認識に即して、丘の「迷信」論が、「天皇制」が強化されていく歴史に対する批判の意味をもっていたといえる論拠をあげよう。「疑ひの教育」（1912年）は、「甚だしい迷信者が甚だ多く、特に近年に至つて、却つて著しく増加した」ために、「我らの如き明治生まれの者」も思考力が鈍くなつたと論じた⁵⁵⁾。この「迷信」と「明治」の意味を考える手がかりとして、「先ずチョン髷を切れ」（1920年）は、明治維新後に髪のチョン髷と頭骨内のチョン髷を切り捨てたが、後者は再び延び始めたとして、容易に触れることのできない問題に触れる時代認識を次のように論じた。

明治二十年代の前半の中ごろには立派なチョン髷が結えるようになり、明治四十年代の前半の中ごろにはさらに前に倍する大チョン髷になった。頭の内のチョン髷というのは国粹保存と称する仮面をかぶった頑迷固階な旧弊思想のことである。（中略）我らが小学校にかようていた明治十年ごろには旧弊を旧弊

として遠慮なく排斥することができたように覚えている。（中略）迷信を迷信として公然と排斥することのできた明治の初年はこの点〔子供や青年が自分自身の思考力によって独立に物事を判断する習慣〕においては今日よりはるかにまさっていた。（中略）真に教育を改造するつもりならば、今一度明治の初年に立ち帰つたつもりになり、大英断をもって頭骨内のチョン髷を切り捨てることが何よりも先に必要であろう⁵⁶⁾。

ここで丘は、旧弊や「迷信」の中身の明言を避けると同時に明確な時期区分をしている。明治20年代前半中頃の「立派なチョン髷」と、「改善は頭から」の「明治二十二三年の頃からは、迷信の攻撃に大に手加減をする」という主張を合わせ読むと⁵⁷⁾、丘が明治憲法と教育勅語を批判していたことが判明する。「教育と迷信」（1911年5月）で丘は、1か月前に小松原英太郎文相が大逆事件後の社会主義対策として始めた敬神崇祖や教育勅語を徹底しようとする教育政策を、「迷信」を利用する教育政策とよんで批判している⁵⁸⁾。これを踏まえると、明治40年代前半中頃の「前に倍する大チョン髷」（傍点－引用者）は、大逆事件とそれを契機に開始された敬神崇祖や教育勅語を徹底しようとする政府の教育政策を、前の「立派なチョン髷」である教育勅語をさらに倍にする「大チョン髷となった」と批判していたことが判明する。つまり、丘のチョン髷批判や「迷信」論は、明治憲法や教育勅語や大逆事件などを「天皇制」の根本的要素と捉えて批判する意味をもっていた。更に丘は、「天皇制」の確立以前に「迷信」を公然と排斥できた「明治の初年」の精神を基盤にして、「天皇制」（頭骨内のチョン髷）を切り捨てよと主張した。1911年頃から1920年にかけて丘は、第1の要素を核にして「天皇制」（迷信）に対する批判意識を強化していったと位置づけられる。

以上の「迷信」をめぐる文脈が、1911年頃か

ら1920年代にかけて丘が、『進化論』の第1の要素（特に「人類の位置」から出発する思考）に基づいて「天皇制」に対する批判意識を強化していったという論拠になる。それと同時に、その中間地点の1914年版において論じられた「迷信」が「天皇制」を意味していたという論拠にもなる。第1の要素と「天皇制」の矛盾が顕在化した直後に、丘がレトリックを駆使して天皇制や天皇を批判したという経験をふまえなければ、1904年版と1914年版に同様に使われた「迷信」という言葉がもつ意味の重さの違いや、叙述が変化した意味は理解しにくい。

4.3 3つの要素が変化した意味と理由

最後に、1904年版に混在していた丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの要素が、1914年版で変化した意味とその理由を考える。前提として、丘は1911年頃から「迷信」批判を始めるので、「迷信」の意味を考える1900年代のデータは少ないという史的制約がある。そこで本稿は、1904年版から1911年版までの「迷信」は「天皇制」を暗示した可能性があるという推測を交える。

1904年版に3つの要素が混在したことは、丘が、一般の人々に進化論を普及して視座を変革するという課題、生存競争論を通じて日露戦争といかに向きあうかという課題、進化論との潜在的矛盾を抱えた「天皇制」といかに向きあうかという課題などに同時に取り組んだことを意味したと推測できる。そして、進化論と「迷信」をめぐる打破論と利用論と調和論が混在していたように、進化論と「天皇制」を暗示する可能性のある「迷信」の向きあい方はいまだ定まっていなかった。1914年版で3つの要素が変化したことは、丘が、進化論を人々に普及する従来の課題に加えて、進化論との矛盾が顕在化した「天皇制」を意味する「迷信」といかに向きあうかという新たな課題に取り組んだことを意味した。つまり、1904年版に混在していた3つの要素が変化したことは、丘が第1の要素に基づいて「迷信」

を「天皇制」として明確に意識すると同時に、「迷信＝天皇制」に対する批判意識を強化したことを意味したと位置づけられる。

第2の要素の内容が変化した理由として、丘は、日露戦争中には戦争を遂行する政府をあまり疑うことなく肯定していたが、1912年頃からは「天皇制」の強制を強化していく政府を疑って距離を置き始めたことが指摘できる。「神の祟り」は、「一定の信仰を強制することも、時と場合によってはむろん必要で、愚昧な人民を率いて、国家の危機を切り抜けようとするときは、おそらくこれによるのほかはなかりうが、時勢の進歩にかまわず、どこまでもその信仰を強制し続けければ（中略）次第に滅亡せざるを得ない」と警告している⁵⁹。これは丘が、1904年版では、国家の危機に「愚昧な人民」（衆愚）に安心立命を与えて日露戦争の遂行を励ます「迷信」を非常手段としては認めていたが、1913年には、人民に「強制信条中の迷信」（天皇制）の強制を続けければ、国家が滅亡に向くと捉え直したことを示唆する。これと同じ意味を、1914年版の「迷信をしばらく保護する」（傍点－引用者）という叙述の追加も持つのだろう。

1905年版で追加された、人種間や国家間の戦争永続論や、「人種全体」の「進歩」をめざす優生学論を肯定するかのような生存競争論の叙述は、1911年版では一定の変化をみせて、1914年版では削除された。その逆に丘は、生存競争論の単位を、日露戦争期の優生学論や戦争永続論から、1913年における「普通の世間」の生存競争の経験を否定された「天皇」を「人間」として認識する内容や、1920年代における国内の階級闘争へと読みかえていく。その背景には、大逆事件とそれを契機に開始された教育勅語を徹底する政府の教育政策を「大チヨン髻」と批判した丘の意識変化があった。丘は、「大チヨン髻」の延長線上に丘自身への筆禍事件も起こったと捉えたのだろう。もしも1913年以後に丘が、「天皇制」を強制する政府とは距離を置くことなく、

生存競争論に依拠して、戦争永続論や優生学論を展開し続けたならば、「天皇制」と帝国主義を擁護する社会ダーウィニストが誕生したであろう。

第3の要素が縮小した理由として、1912年頃に第3の要素が成立しがたくなることが指摘できる。1904年版は、将来は一般の人々が進化論を理解することによって、智者が増えて愚者が減ると予測して、「今後の宗教」には進化論と調和する資格を求めた。これを逆にいえば、丘の進化論と「迷信」が対立して、一般の人々が進化論を理解することを禁じる事件が起こり、更に「迷信」が人々を愚民化していると捉えた場合には、第3の要素は成立しがたくなる。そして実際1912年頃に、『進化論』で一般の人々に進化論を普及する丘と「天皇制」の矛盾が顕在化した。1904年版の楽観的予測とは正反対の筆禍事件が起きた直後に、「神の祟り」は、ご真影礼拝、君が代斉唱、教育勅語奉読式などを暗示する教育儀礼を、子供に「天皇制」を注入することによって思考力の発達を抑制して愚民化していくイカサマと否定した。丘にとってはこの時が、日本において進化論は「天皇制」と調和するものではなく、対立するものであることを自覚する契機になったと考えられる。つまり第3の要素は、丘が進化論と「天皇制」の向きあい方を模索していた1900年代特有の要素だったといえる。

丘が第1の要素に基づいて「迷信」に対する批判を強化した理由として、1912年頃に丘の進化論と「天皇制」の矛盾が顕在化した直後に、丘が「天皇制」批判を公表した経験が大きな契機になったと指摘できる。『進化論』は、自然史論に基づいて、「進化の事実」という土台の上に成立する「人間の位置」を一般の人々に広く普及して、その逆に、「神」が創造した各生物とその頂点に君臨する万物の霊長である人間は「万世不変のもの」と捉える「不変の説」を徹底的に否定した。『進化論』の第1の要素は、数億年の自然史の中で、「万世不変」を唱える思想や人間を神格化する人間観を否定する特徴をもつため

に、明治憲法第一条の「大日本帝国は万世一系の天皇之を統治す」（以上、傍点-引用者）や記紀神話に基づいて、皇統の連続性や神聖性や正統性などを強調する国体論とは、論理的に対立する。そして実際、丘が一般の人々に進化論を普及し続けた結果、『進化論』の第1の要素と、一人の「人間」を万世一系の天皇へと神格化する記紀神話や「皇国史観」の神話教育との矛盾が顕在化する事件が起こった。この矛盾が顕在化した時が、多様な要素が混在していた丘の思想の中で何が最も重要なのかということが試される試金石になったと位置づけられる。そしてこの直後に丘が「神の祟り」を公表する行動を選んだことこそが、丘に混在した3つの要素が変化していく大きな理由となったのである。

5. おわりに

本稿は、『進化論』の内在的論理、読者のさまざまな批評、各版の変化とその意味などを総合的に考察することによって、『進化論』に混在していた3つの要素とその変化の構造を明らかにした。

各章の論旨を要約すると、2章では、丘が設定した枠組みや論理などに注目しながら、『進化論』という作品全体の中に不均等に混在していた3つの要素を整理することによって、『進化論』全体の基本的特徴を検討した。3章では、読者のさまざまな批評を、丘の進化論を受容して視座が変化したと語った第1のタイプ、丘の生存競争論の問題点を批判した第2のタイプ、丘の進化論と国体論を調和させようと試みた第3のタイプに類型化することによって、『進化論』の3つの要素と読者の対応関係を明らかにした。4章では、『進化論』各版を比較することによって、丘の進化論と「迷信」をめぐる3つの相反する要素が混在していたことと、その3つの要素が変化したことを明らかにした。1904年版では、「進化の事実」と「人類の位置」を一般の人々に普及すると共に、視座を変革することによって「迷信」を打破す

る第1の要素、武力戦争を励ます「迷信」を保護して利用すると共に、進化論で帝国主義を擁護する第2の要素、智者には不要な「迷信」を衆愚むけに利用すると共に、進化論と「迷信」を調和させる第3の要素が同時に混在していた。それと比べて1914年版では、第2と第3の要素が縮小されると共に、第1の要素の核となる「人類の位置」から出発する思考に基づいて「迷信=天皇制」に対する批判意識が強化されて、丘は「従来の宗教的信仰」に反抗する文芸作品が現れると宣言した。3つの要素が変化する契機は、「天皇制」と丘の進化論の矛盾が顕在化した直後に、丘が「神の祟り」を公表して、レトリックを用いながら天皇制や天皇を批判したという経験にあった。

本稿が論じた丘の3つの要素と、従来の丘研究史の関連を大まかに整理すれば、第1の要素は、筑波常治と福井直秀と右田裕規と私が論じた丘と天皇制の対立に対応する。第2の要素は、森戸辰男が論じたナチスとの酷似や、横山利明が論じた社会ダーウィニズム（筑波と福井もその一部を指摘した）に対応する。第3の要素は、森戸が論じた丘と天皇制の調和（右田もその一部を指摘した）に対応する。時期区分をすれば、1904年版に関しては、丘に混在していた3つの要素に対応する範囲で各論者の批評は一定の説得力をもつといえるが、1913年以降の丘の言説と1914年版に関しては、第1の要素を論じた論者の説得力が強まり、その逆に第2の要素と第3の要素を論じた論者の説得力が弱まると位置づけられる。

最後に、『進化論』の第1の要素の核となる「人類の位置」から出発する丘の思考と、「共和国」を中心とする1920年代の丘の共和主義の関連性を考えることによって、丘の共和主義を支えた思想的基盤の一つを明らかにする。

丘の思考には、眼前の現状を長大な歴史的变化の中で客観的に認識する歴史観、人間を自然界の一部分として認識する自然観、自然史の中でいかなる階級や身分の人間でも同等の一生物

に過ぎないと認識する人間観などが密接に組み合わさっていた。この丘の思考は1920年代には、過去の猿の群から現在の王国になり未来の共和国までに至る人類史を提示する歴史観、自然界の一生物と認識した人類を他の動物の生活と比較する自然観、階級心理が退化して天賦人権論を自覚した人民が君主制や階級制度を否定する万人平等の人間観などとなって継承される。

1920年代に丘は、歴史的事実を省いた抽象的な西欧史に仮託することによって、日本を射程に含んだ長大な人類史を提示するレトリックを駆使して、天皇制国家を相対化するエッセイを多数公表していく。

その特徴として第1に丘は、過去の猿の群れや原始時代の人類から、現在の天皇制国家を示唆する「世襲的の独裁王国」になり、未来には服従性（奴隷根性や階級心理と同義）の退化した人民が、階級闘争の果てに君主勢力を倒して共和国が出現するという長大なスケールの人類史を提示した。特に、「人類が初め猿類と共同の祖先から起つたものとすれば、これ等の共和国も遠い昔まで遡れば猿の群の様なもの（中略）長い年月の間に次第々々に変遷して終に今日の状態に達した」という主張には、『進化論』の自然史と「共和国」の人類史が結びついている。更に丘は、「少数の人間の人物列伝」（国王）や、「王朝を倒して共和国を起した叛軍の大將」（革命家）の一挙一動を重視する英雄史観を否定した。その逆に丘は、「服従性が退化して来ると、歴史家の物の考へ方も次第に変つて来て、上に立つ少数の者だけが人間である訳ではない、エネルギーの総量からいへば、下に位する多数の者の方が何倍多いか分らぬ」と、民衆生活のエネルギーを重視して、「人類の団体生活の変遷」を探求すれば、「歴史の研究は全く生物学的の見方と一致する」と捉える「人民史観」を提示した。これは、すべての人間を同等の一生物として認識する生物学と、人類の歴史的な変化を考える歴史学が結びついた生物学的歴史観とすることができる。

第2に丘は、進化論に基づいて、自然界で各生物が歴史的に変化する自然史の流れの中で、人類が歴史的に変化する歴史像とその因果関係を大まかに考える生物学的歴史観を提示した。「共和国」は、「人類を生物の一種と見做し、その団体の変遷を論ずるに当つても絶えず他の動物の団体と比較しながら考へを進めて行く（中略）他の動物の団体生活を背景とした舞台の中央に人類の団体を据ゑ、自分は遠く離れた栈敷から見物して居る心持ちで眺める」と論じて人類を猿類と比較した。この丘の認識に即して考えれば、人類は、各生物が団体生活を行う自然界の舞台上で、同様に団体生活を行う一生物（役者）に過ぎなくなる⁶⁰⁾。

第3に丘は、天賦人權論や民定憲法論の系譜に連なる共和主義を公表した上で、その共和主義を人類社会の「進化」と安易に理想化することなく、「共和国の出現」後に生じる課題を読者に提示した。丘は『進化論』の自然史と「共和国」の人類史を結びつけて、猿の群れから王国になり共和国まで変化する人類史を提示した。ここで特に重要になるポイントとして、丘は人類史が変化すること自体の意味づけに関しては、人類社会の構成の進化と捉えることなく、逆説的な二重の意味をもつ退化と捉えて論じた点に丘の独自性がある⁶¹⁾。「共和国」に即して説明すると、第1の退化は、人民の服従性の退化に伴い、君主制や階級制度が崩壊して共和国が出現するという意味であり、丘はこの人類史の変化を基本的に肯定した。「共和国」の「六 服従性の退化」は、天賦人權論や民定憲法論の系譜に連なる共和主義を次のように公表した。

団体的精神が退化して国王やその部下が勝手なことを為し始めると、勢ひ国王と人民との利害が衝突し、国の政治を国王一人に委せて置いては何事を仕出かすか分らぬとの懸念から、人民は国王に迫つて、国王と雖も、これだけの規則は決して犯さぬといふ約束をさ

せようとする。国王は自分の権限を狭められることは無論好まぬから、初めは斯様な申し出を拒絶するが、多勢に無勢で終に余儀なくこれを承諾する。斯くして出来たものが斯様な国の所謂憲法であるから、立憲王国なるものは、憲法も何もなくてよく治まつた専制王国から見れば、団体的精神が余程退化した後に初めて出来た（中略）〔服従性の退化と共に階級闘争が激しくなるが、特権階級は少数なので、〕多勢に無勢で到底叶はず、一步一步退いて、終には国王までがその位を保つことが出来ぬ様になつて、天下は一人の天下にあらず、天下は天下の天下なりといふ状態に立ち至る。凡そ共和国なるものは、（中略）全く服従性の退化したために生じた結果である⁶²⁾。

君主制否定と結びつく「天下は天下の天下なり」は、儒教的観念と西欧の自然権が組み合わさることによって成立する、すべての人間には権力が奪えない自由や平等の自然権が「天」から賦与されるという天賦人權論に位置づけられる。この6年前に吉野作造は、参政権付与の根拠が、「天賦人權説より発出したる主権在民論」ではなく、「天賦人權論の廃つた今日に於ては（中略）国家的経営の積極的責任の分担」にあると論じた⁶³⁾。天賦人權論に基づいた主権在民論を時代遅れの古い思想と捉えた吉野と比べると、丘は、明治初期の思想を継承して君主制否定と結びつく天賦人權論に連なる共和主義を主張したといえる。

遠山茂樹は、自由民権家が抽象的な理論の次元では、「立憲君主制が共和制に進化するのは歴史の法則」と公言すると同時に、具体的な政治の次元では、「国民の政治意識の発展の程度」を理由に立憲君主制をめざして天皇や政府の協力を求めたと指摘した。遠山が指摘した民権家の理論と政治の使い分けと比べると、丘は、政治学的な論理形式をとってはいないが、人民の政治意識（服従性）の程度を理由にして立憲王国

を正当化することなく、猿の群れから天皇制国家を示唆する王国になり共和国まで変化する人類史を公表したといえる。丘が王国を正当化していないことは憲法論からもうかがえる。自然史家である丘には、政治学的な論理形式で論じた主権論や憲法理論の体系的理論は見られないが、君主勢力（国王や部下）ではなく、人民こそが「憲法」を制定する権力を持つと捉える人民主権の発想がある。憲法の制定主体の分類として、丘は、君主が制定する欽定憲法や、君主と人民が制定する協約憲法ではなく、人民が君主勢力に「規則は決して犯さぬといふ約束」を承諾させて君主権力を制限するという、人民が制定する〈民定憲法の原理〉をわかりやすい言葉で公表した。つまり丘は、天皇主権に基づいて人民の承認を得ることなく天皇に憲法制定権力を認めて、天皇が臣民に兵役や納税の義務を命じて制限付きの権利を下賜した欽定憲法下にもかわらず、人民主権の発想に基づいて、君主勢力の専制を懸念する人民が、民意を結集して制定した憲法作用の要を権力制限に求める民定憲法を君主勢力に押しつけて、その約束を守る義務を遵守させる〈民主主義の原理〉を宣言したと位置づけられる。

階級制度を支える階級心理に関して丘は、「階級制度は元来、奴隷根性を基礎として、その上に築き上げたものゆえ、奴隷根性が少しずつ退化すれば、階級制度は片隅から次第にくずれかかる」と主張した。具体的には、「最多数を占めておる最下級の者」は、奴隷根性が退化すると物の見方が変化して、上級者の服従の強制に対して不審を起し始めて、「酋長の位が世襲的となって有為の父の跡を愚劣な息子が継ぐ」場合には、「彼も人なり、我も人なり、天が人を造るに当たって彼を我よりも上に造ったわけではなからう」と「自由平等の権利」を自覚して、階級闘争の果てに「貴賤の差別」を廃止すると論じている。更に丘は、服従性が退化すると「男のみが人間ではない、女も同じく人間であると

叫んで一日も早く奴隷の境遇から開放せられることを要求して止まぬ（中略）婦人の自覚」の時代が来ると論じている⁶⁴。

以上のように、国王も人民も、世襲酋長も下級者も、男も女も、万人は「同じく人間である」と捉えた丘の認識の土台には、「人類の位置」という問題から出発して、長大な自然史の中で考えれば、いかなる階級や性別の人間でも同等の一生物に過ぎないと認識する人間観へと帰結していく第1の要素があった。つまり丘は、第1の要素から出発して、天賦人權論に基づく万人平等の人間観に到達したと位置づけられる。

第2の退化は、人民の協力一致（団体的精神）の退化に伴い、従来の団体生活を支えていた共同性が失われていくという意味であり、丘はこの人類史の変化が招く新たな課題の答えを提示することなく、そのまま読者に問いかけた。丘は、「さて共和国になつたら、それで治まるかといふに、共和政治を要求するまでに服従性の退化した人間は、それと同時に団体的精神も退化して居る（中略）団体的精神とは生まれながらに協力一致せずには居られぬといふ精神である（中略）団体内は争ひで満たされ（中略）理想的の団体生活からは次第に遠ざかり行くばかり」と、「共和国の出現」後に生じる課題を読者に投げかけた。例えば、「昔からの特権階級は革命によつて倒し得たとしても」、人類の社会生活が従来どおりであれば、新たな特権階級が現れて多数を奴隷にしてしまう。「貧富の争ひ」（経済格差の増大が招く争い）を解決する「財産に関する社会の仕組を根底から造り換へる」方法も不明である。ただ丘は、「幾分かでも改良が出来れば、それで満足するの外はない」と論じて終わる。

実は丘は、共和主義や自由や平等をめざす社会改造をいったん肯定した上で、改造後に社会が「理想の世界」に進化していくと妄信すると理想と現実が乖離してしまうと自戒しながら、それでも改造後に生じる課題に向きあう覚悟と努力を読者に提示するという、一連の過程を同

時に認識する発想をもっていた。この丘の発想をふまえると「共和国」は、共和主義をいったん肯定した上で、共和国を過度に理想化することを自戒しながら、それでも共和国の成立後に生じる新たな独裁の出現や経済格差の増大などの課題と向きあう覚悟と努力を読者に提示したと解釈することができる。

一体なぜ丘は、共和主義を、自由民権家のように「進化」という楽観的な言葉ではなく、「退化」という逆説的な言葉で読者に問いかけるように論じたのだろうか。これはとても難しい論点だが、丘は、主権在民を回避しない民主主義思想の一つである共和主義を、人類進化の最終到達点と理想化して絶対視するのではなく、新たな課題と向きあう出発点と捉えていたのではないだろうか。例えば丘は、革命後に新たに生じる煩悶の一つとして、「さて旧制度を倒した結果は如何にと言うに、今まで威張っていた人々に（中略）往来を掃かせたりしていささか鬱憤を晴らしただけで少しも後の始末が付かず、ただ紛擾を重ねるばかりか、いつ秩序が回復するやら見込みが立たぬ。大きな団体の中心がなくなったのであるから、曲りなりにもこれをまとめることは容易でない」と読者に問いかけた。これは、共和国の成立後に生じる自治の課題（新たな独裁の出現や経済格差の増大）と向きあう覚悟を注意したと解釈することもできる。しかし、より根本的な問題として、丘には、革命後の無秩序な混沌状態（紛擾）を収束する安定した制度や、多種多様な人々が生きる共和国を一つにまとめる統合の象徴（団体の中心）を求める発想はなかった。

つまり丘は、天皇制とは異なる（又は天皇制なき後に）共和主義を根底で支える基盤を一体どうするのかという課題の答えを提示しなかった。答えがない理由として、共和主義の議論を禁じる時代状況や、奴隷根性（君主制を支える階級心理）が退化すると協力一致（団体の自治を支える共同性）も退化するという考え方など

の影響が考えられる。丘が遺していった課題は、近現代の天皇制と共和主義を考える場合に必ず生じる現代的課題である。そして私たちが、この課題を解かない限り、「丘浅次郎という思想的問題史」は終わらないのではないだろうか⁶⁵⁾。

自然史と人類史と「人民史観」が結びつく歴史観、人類を各生物が生きる自然界の一部分と認識する自然観、すべての人間を同等の一生物と認識する人間観、長大な自然界の自然史から眺めればちっぽけな人類は理想世界を実現できないと自戒した上で改造と課題と向きあう発想などの根底には、「人類の位置」という出発点から組み立てられる丘の思考があった。そして特に、丘は、『進化論』の自然史と「共和国」の人類史を結びつけて人類史の変化を導き出したが、変化そのものは進化ではなく退化として捉えた上で、人民の服従性の退化に伴う共和主義の出現を公表すると共に、人民の協力一致の退化に伴い生じる共和主義を支える基盤という課題を読者に問いかけた。いかなる階級や性別をもつ人間であっても、自然史から眺めれば一人ひとり「同じく人間である」と認識する万人平等の人間観がなければ、「君主制を支える階級心理を否定して、民主主義の精神と制度をめざす」共和主義は成立しえない。そして丘は、自然界の自然史の中で一生物と認識した人類の歴史的变化を考える「人類の位置」という問題を一生涯問い続けた結果、共和主義に到達しえたのではないだろうか。

注

- 1) 森戸辰男「我国における研究自由闘争史の一節」『岩波講座哲学』岩波書店、1933年、5～7、10、28～32、41頁。
- 2) 横山利明『日本進化思想史（一）』新水社、2005年、78、91～92頁。
- 3) 筑波常治『現代日本思想体系26科学の思想Ⅱ』筑摩書房、1964年、25～26頁。
- 4) 福井直秀「丘浅次郎の教育思想」『京都大学教育学部紀要』第27号1981年3月、49～60頁。

- 5) 右田裕規『天皇制と進化論』青弓社、2009年3月、36～43、57、111～113頁。右田は人獣同祖説を、「ヒトは現存する他の哺乳類と同じ祖先から進化した生物であり、その究極的な起源はごく小さな原生動物にある」と説明した(同上、14頁)。
- 6) 「丘浅次郎さえ、隠喩的な形で皇国史観を否定するにとどまった。かれらは加藤〔弘之〕と同じく、皇国史観との矛盾という問題を括弧に入れつつ、進化論の啓蒙に努めることで、皇国史観との両立をはかり、出版警察などからの干渉を未然に防いでいた」(右田裕規「明治知識人層における生物進化論の流行再考」『科学史研究』第42巻第225号2003年、6頁)。
- 7) 拙稿「近代日本における共和主義—1920年代の丘浅次郎を通じて」『総研大 文化科学研究』第5号2009年3月、38～40、63、67頁。以下でも閲覧可能。http://www.initiative.soken.ac.jp/journal_bunka/index.html
- 8) 多くの論者が批判した丘の生存競争論の問題点は、1906年に北一輝が批判している(3章)。
- 9) 2009年11月28日に首都大学東京で行われたメトロポリタン史学会のシンポジウム「ダーウィン・進化論と歴史学—『種の起源』刊行150周年によせて—」の主旨文は、「ダーウィン『種の起源』が歴史学や社会諸科学に与えた影響は疑いもなく大きいものがあります。しかし、本来、生物学の分野における業績である『種の起源』が、なぜ人間とその社会にかんする研究分野にまで大きな影響を及ぼしたのでしょうか」と問題提起をした。私も「日本における進化論の受容—丘浅次郎の進化論と進化論に基いた社会認識を通じて—」を報告させていただいた。<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/> 本稿が検討する『進化論』の第1の要素の核となる自然史論や、自然史を核とする進化論に基づいた丘の社会認識などは、この研究会の問題提起と報告と議論などを通じて学んだことも反映している。記して感謝したい。
- 10) 横山利明は、北一輝や大杉栄を丘の進化論を批判した批評として検討したが、丘の進化論に賛同した批評の掘り下げた検討はない。右田裕規は、大杉、鶴見俊輔、田中美智太郎を丘の進化論に賛同した批評として検討して、佐々木高行を国体論と丘の進化論の矛盾の解消を試みた批評(批評の内容よりも、佐々木の政治的立場に注目する)として検討したが、丘の進化論を批判した北、石川三四郎、森戸辰男などは出てこない。二人とも、自己の論旨とは相反する批評を含めて『進化論』の読者の全体像を検討してはいいのではないだろうか。
- 11) 土田杏村『土田杏村全集第4巻』第一書房、1935年、66頁。
- 12) 小野俊一『子孫崇拜論』黎明社、1924年、250頁。
- 13) 丘浅次郎(以下、丘と略称する)『進化論講話第4版』開成館、1904年、1～5頁。
- 14) 丘『進化論講話』開成館、1904年(筑波常治編『近代日本思想史大系9丘浅次郎集』筑摩書房、1974年、4、8～19、233頁〔以下、同書を⑨と略称する〕)。
- 15) 同上、81、85、117、144～145、157、168、185、229頁。
- 16) 同上、227～228頁。この叙述は『進化論』1911年版までは変化しない。1914年版から1940年版までは第15章の「一 事実の益々確となったこと」にほとんど同じ叙述が見られる。
- 17) 「18世紀から19世紀にかけて、折からの帝国主義の台頭に合わせて、珍奇な動植物や未知の秘境を求めて多くの探検旅行が組織され、膨大な量の博物学的知識が蓄積された。やがてビュフォンの《自然誌》、カントとラプラスの太陽系起原論、ライエルの《地質学原理》、ラマルクとC・ダーウィンの生物進化論などの相次ぐ発展によって、これら多様な自然物(のみならず自然全体)は歴史的に形成されたものであるという認識が加えられて、博物学は自然史学としての性格も併せもつようになった。そして19世紀半ば以降、自然の多様性の研究は単なる記載・分類の学ではなくなった。その後、博物学ということばは、一方では記載・分類の学という意味に主として使われながら、一方では自然、とくに生物的自然の多様性とその歴史の研究という意味をもち続けてきた」(浦本昌紀「博物学」『大百科事典』平凡社、1984年)。
- 18) 西村三郎は、東京大学を基盤にして東京植物学会(1882年)と東京動物学会(1885年)が設立された点、博物学とは無縁のお雇い外国人や留学帰朝者が教育研究体制を築いた点、江戸博物学を継承した伊藤圭介が1901年に死亡して田中芳男も1916年に死亡した点などを挙げて、1880年代～1900年代にかけて、江戸博物学が終焉すると共に、それと断絶した形で明治の近代生物学の教育研究体制がスタートしたと位置づけた(西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本(下巻)』紀伊国屋書店、1999年、551～561頁)。
- 19) 前掲『進化論講話』、85、91～93、103～105、

- 122、126 ~ 127、140 ~ 141、151、168、180、183 ~ 184頁。
- 20) 同上、151 ~ 159頁。
- 21) 同上、237 ~ 238頁。
- 22) 丘『教育と博物学』開成館、1901年 (⑨、293 ~ 295頁)。
- 23) 前掲『進化論講話』、252頁。
- 24) 同上、238 ~ 241、249 ~ 251、255 ~ 257頁。
- 25) 丘「落第と退校」1926年4月 (⑨、390 ~ 391頁)。
- 26) 同上、391 ~ 394頁。
- 27) 丘『進化論講話 第五版』開成館、1905年、802 ~ 803頁。同じ叙述は1907年版と1909年版にも残るが、1911年版以降は削除される。日露戦争期の社会意識を反映した叙述だといえるだろう。
- 28) 「進化論講話に対する世評一斑」『進化論講話 第四版』開成館、1904年、巻末付録、1 ~ 12頁。
- 29) 丘『進化論講話 第十四版』開成館、1940年、はしがき8頁。
- 30) 『山本宣治全集第一巻』汐文社、1979年 (初出1921年)、67頁。
- 31) 丘「ヘッケルの思ひ出」『心理学研究』1919年10月第16巻第4冊第94号、357頁。
- 32) 大杉栄「丘博士の生物学的人生社会観を論ず」『中央公論』1917年5月 (⑨、411 ~ 412頁)。
- 33) 大杉栄『自叙伝・日本脱出記』岩波書店、1971年 (初出1923年)、168 ~ 169頁。
- 34) 田中美知太郎『時代と私』文芸春秋社、1971年、78 ~ 79頁。
- 35) 鶴見俊輔「解説」『丘浅次郎著作集Ⅲ猿の群れから共和国まで』有精堂、1968年、231 ~ 232頁。鶴見は、日常語で生物発生原則を語った『進化論』が、夢野九作に継承されたと次のように論じた。「『進化論』は、小学生にも読めるんですよ。すごい語りの技術なんです。そこにあるのがヘッケルの個体発生は系統発生をくり返すという主張で、夢野久作は『百科全書』と『進化論講話』を手がかりに『ドグラ・マグラ』を書いた。だから個体発生の中に系統発生の手がかりがあるという、何億年の物語が自分のなかに響きとしてある。そこから物語を紡ぐんですね」(『鶴見俊輔座談 学ぶとは何だろうか』晶文社、1996年、435頁)。たしかに、「巻頭歌 胎児よ胎児よ何故躍る 母親の心がわかっておそろしいのか」で始まる『ドグラ・マグラ』(1935年)は、生物発生原則を語った『進化論』の論点を、胎動する胎児 (現在の個体発生) が夢見る恐ろしい母親の心 (数億年の系統発生) という主題に読みかえたと読める。両作品は、長大な歴史感覚を日常的な言葉で語ることによって、同時代の閉鎖的で難解な作品の枠組みを破った。これは『進化論』の自然史論が、狭義の生物学の話としてだけ受容されたのではなく、文学も含めた幅広い各分野で受容されたことを示す具体例である。
- 36) 織田秀実「丘浅次郎先生の面影」『生物科学』第46巻3号1994年9月、113、117、119頁。
- 37) 前掲『進化論講話』、273頁。
- 38) 北一輝『北一輝著作集第1巻 国体論及び純正社会主義』みすず書店、1959年 (初出1906年)、緒言6頁。98 ~ 100、109 ~ 112頁。
- 39) 石川三四郎『非進化論と人生』白揚社、1925年、序7頁。2、71 ~ 72、76 ~ 77、270頁。
- 40) 佐々木高行「進化論より見たる我が帝国」『太陽』第13巻11号1907年8月1日45 ~ 49頁。
- 41) 丘「戦争と平和」『青年界』1904年4月 (『丘浅次郎著作集Ⅰ進化と人生』有精堂、1968年、85 ~ 97頁。以下、同書をⅠと略称する)。
- 42) 前掲『進化論講話』、273頁。丘『進化論講話 第十版』開成館、1911年、616頁。丘『丘浅次郎著作集Ⅴ進化論講話』有精堂、1969年 (初出1914年)、はしがき1頁 (以下、同書をⅤと略称する)。
- 43) 前掲『進化論講話』、267 ~ 275頁。前掲Ⅴ、381 ~ 387頁。
- 44) 丘「民種改善学の実際の価値」『人性』1911年5月 (Ⅰ、196 ~ 203頁)。
- 45) 前掲『進化論講話 第十版』、622 ~ 626頁。
- 46) 丘『丘浅次郎著作集Ⅵ生物学講話』有精堂、1969年 (初出1916年)、524 ~ 525頁。
- 47) 丘「優生学の実際の価値」『教育学術界』第6巻第41号1920年9月、559 ~ 560頁。丘は、『最新遺伝論』六盟館、1919年、528 ~ 534頁でも、優生学に疑問を投げかけている。
- 48) 前掲「近代日本における共和主義」、39、52 ~ 53、66頁。
- 49) 丘には、「著者の宗教攻撃論には一向服すること能はざる (中略)『的なきに矢を放つ』」(『帝国文学』)、「宗教を罵り哲学を嘲り巻中の到る処に気焰を吐いて頗る奇観を呈して居るが只其の耶蘇教の天地開闢説に対して余りにウルサク當つて居る所は日本では的なきに矢を放つた」(堺利彦) など疑問がよせられた (前掲「進化論講話に対する世評一斑」、6 ~ 11頁)。
- 50) 前掲『進化論講話』、208 ~ 209頁。別稿では、丘とハクスレーやダーウィンを比較したい。

- 51) 前掲「近代日本における共和主義」、46頁。
- 52) 同上、41～42頁。
- 53) 丘「新人と旧人」『雄弁』1918年11月（『丘浅次郎著作集Ⅱ煩悶と自由』有精堂、1968年、63頁〔以下、同書をⅡと略称する〕）。
- 54) 丘「所謂偉人」1921年6月（⑨、352頁）。
- 55) 丘「疑ひの教育」『教育研究』1912年7月（⑨、379頁）。
- 56) 丘「先ずチヨン鬣を切れ」『教育研究』1920年1月（Ⅱ、192、198～199頁）。
- 57) 筑波常治は、丘が「迷信を思ふ存分排斥することの出来たその頃〔明治8年～9年〕の教育は、今日から見ると頭の改善には遥に有効であつた（中略）明治二十二年の頃からは、迷信の攻撃に大に手加減をする」と論じた「改善は頭から」（1926年）を引用して、丘が教育勅語を批判したと指摘した（⑨、442～443頁）。適切な解説だが、引用の直後にある「思い切って、馬鹿げた迷信を捨てて見せることが必要である（中略）明治の初年にチヨン鬣を切り落としたときにも、反対した人はあつた」という指摘も、二つの評論の関連性を考える上で重要である。
- 58) 丘「教育と迷信」1911年5月（Ⅰ、126～128頁）。
- 59) 丘「触らぬ神の祟り」『中央公論』1913年1月（Ⅱ、28頁）。1910年代における丘の思想の特徴は別稿で改めて論じたい。
- 60) 前掲「近代日本における共和主義」、49～50頁。
- 61) 基本的に丘は、1900年代までは人類の変化を「進化」と捉えたが、「人類の将来」（1910年1月）以降は、人類の変化を逆説的な意味をもつ「退化」として捉えた。丘の退化論は別稿で改めて論じたい。
- 62) 丘「猿の群れから共和国まで」『大阪毎日新聞』1924年4月（⑨、405頁）。
- 63) 吉野作造「民本主義の意義を説いて再び憲政有終の美を済すの途を論ず」『中央公論』1918年1月号（太田雅夫編『資料 大正デモクラシー論争史 下巻』新泉社、1971年、89頁）。
- 64) 前掲「近代日本における共和主義」、36、47、51～55頁。
- 65) 同上、54～55、63～64頁。

The Structure of the Changes in Asajirou Oka's Shinkaron-Kouwa: Through the comparison of the 1904 edition and the 1914 edition

SANUKI, Masakazu

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies, Department of Japanese History

How did evolutionists in modern Japan face the Japanese Emperor system? The purpose of this paper is to clarify Asajirou Oka's (1868~1944) theory of evolution by considering his Shinkaron-Kouwa (1904~1914), to explain how Oka faced the Japanese Emperor system, and to explore the structure of the changes in his theory between 1904 and 1914.

Thus far, Oka's theory of evolution has been criticized from various viewpoints. However, Oka's evaluation is not final because, until now, researchers have criticized Oka's ideas one-sidedly, without paying attention to the variety of Oka's ideas and the evolution of his theory. Actually, three different factors co-existed in Oka in the early 1900's; however, most researchers focused on only one or two of those factors. So the evaluation of the Shinkaron-Kouwa is as yet incomplete and rather one-sided. Therefore, this paper considers the logic of the Shinkaron-Kouwa, its readers' various criticisms, and the changes to Oka's theory between the two editions, showing how the three factors of Oka's theory of evolution and 'superstition' intermingled in the 1904 edition, and how those factors changed by 1914.

In the first section, this paper examines the basic features and logic of the Shinkaron-Kouwa by putting the three factors of in-equality in the whole of the Shinkaron-Kouwa in order, considers that 'the position of the human in nature' could consist of 'the fact of evolution' and the theory of natural history that existed at the foundation of these two subjects, and finally shows the relevance of Oka's thought from 'the position of the human in nature' to Oka's republicanism in the 1920's.

In the second section, this paper looks at readers' various criticisms of the Shinkaron-Kouwa, examining their emphases, logic, and responses. Thus far, the general impression of the readers of Shinkaron-Kouwa has hardly been considered, but a thorough examination of how Oka's theories were received will broaden understanding of the context surrounding the changes he made in the 1914 edition.

In the third section, this paper considers the structure of the changes in the three factors in Oka's theory by comparing the two editions of the Shinkaron-Kouwa. From those considerations, this paper clarifies that the three factors of Oka's theory of evolution and 'superstition' intermingled in the 1904 edition, and how his theory evolved by the 1914 edition. This section compares 'the theory of evolution and religion' of each edition relative to the characteristics of Oka's three factors, examines the meaning of Oka's "superstition" argument, and shows how the three factors concerning Oka's theory of evolution changed with regard to his notion of "superstition" – in 1913, Oka's concept of 'superstition' meant 'the Japanese Emperor system'.

Key words: Asajirou Oka, Shinkaron-Kouwa (the theory of evolution lecture), three factors, 'the position of the human in nature', natural history, the reform of viewpoint, social Darwinism, double standard of the wisdom, the Japanese Emperor system state, republicanism